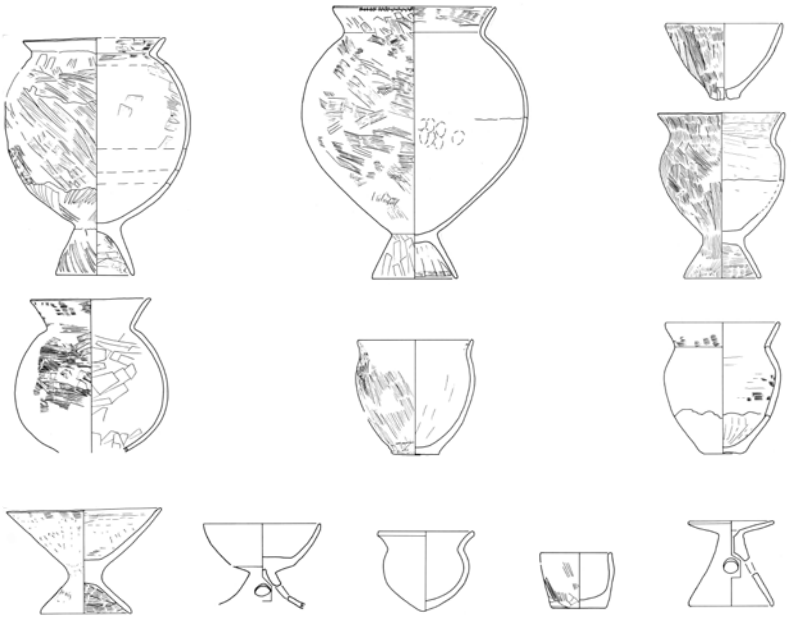
山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 251 集

山梨県山梨市

延 命 寺 遺 跡

－西関東連絡道路建設に伴う発掘調査報告書－



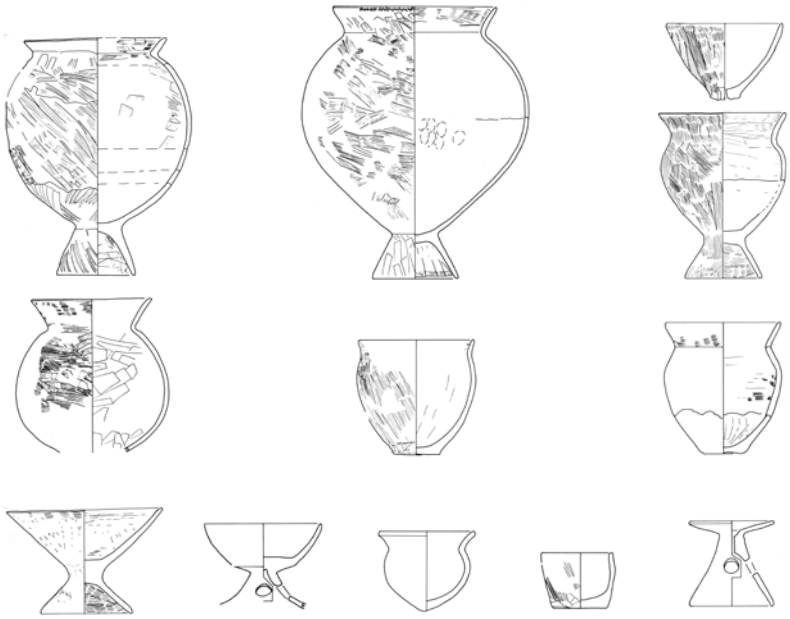
2008.3
山梨県教育委員会
山 梨 県 土 木 部

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第二五一集
延命寺遺跡
二〇〇八・三
山梨県教育委員会　山梨県土木部

山梨県山梨市

延 命 寺 遺 跡

－西関東連絡道路建設に伴う発掘調査報告書－



2008.3

山梨県教育委員会

山 梨 県 土 木 部

延命寺遺跡　旧河道

旧河道からの土器出土状態［Ｓ字状口縁台付甕（1）］

延命寺遺跡の概要

ここに報告する延命寺遺跡の発掘調査は、2006年5月8日から6月5日にかけて、西関東連絡道路建設に先立って行いました。

遺跡名の由来

延命寺遺跡は、山梨県山梨市落合字延命寺180番外にあります。遺跡名は、字名（あざめい）の「延命寺」にちなんで命名されていますが、現在は「延命寺」という寺はありません。江戸時代末に編纂（へんさん）された『甲斐国志』によれば、天正10年（1582）年に織田軍が甲斐へ攻め入るまで、金桜神社に付属する寺院「延命寺」があったとされています。現在も遺跡の北方約300ｍの尾根上に金桜神社があり、尾根上を含めた遺跡の周辺にかつて「延命寺」が存在したこと考えられます。発掘調査では、寺院に関係するものが発見できないかと期待しましたが、残念ながら見つけることができませんでした。

今回の発掘調査では、古墳時代前期（約1600年前）のたくさんの土器や木製品を含んだ川の跡（旧河道）が見つかりました。

表土を取り除いた状態

表土を取り除き、高いところから観察すると、地下の様子がよくわかります。

Ａ：きめの細かい砂～粘土が堆積しています。旧河道（古い川の跡）です。

Ｂ：ごぶし大から鶏卵大の丸い石が多く混じったにぶい黄色の粗い砂が堆積しています。ここも旧河道です。

Ｃ：黒褐色の砂質の土が堆積しています。小石を含んでおり、川が運んできた素材と腐植土などが混じった部分です。古墳時代よりずっと以前にできた土地です。

土器片の出土

本調査に着手する前の試掘で土器が多く見つかった部分から調査を始めました。土器片を取上げながら掘り進めました。そして、土器が出なくなると、替わって丸い石が集中的に出てきました。

丸い石の集中

上からみると、こぶし大以上の丸い石が集中し、細長い島のような形となっています。激しい川の流れによって、一気に運び込まれたものと考えられます。

旧河道土層断面（西壁１）

旧河道土層断面（西壁２）

西壁土層断面拡大

細かい砂～粘土で構成されており、石を含んでいません。

拡大部分を見ると、砂～粘土の薄い縞（10mm 以下）がいくつも重なってひとつの層（土層断面に線を引いて区別したもの）が形成されていることがわかります。こうした堆積構造は、ゆっくりとした水流で形成されたことを示しています。

旧河道の発掘作業

旧河道の発掘作業は、砂～粘土であり、軟らかく掘り進めるのは容易です。しかし、砂粒は岩が細かくなったもので、粘土は水分をたっぷり含み、掘り出した砂～粘土を運ぶのはかなりの重労働でした。

砂～粘土層の中から土器が多く出土しました。この砂～粘土層を取り除くと、丸い石が主体となる層となり、遺物は出なくなりました。

第 12 トレンチでの土器出土状態

土器が原形を保って出土した場合は、土器の位置を比較検討するために、土を柱状に残して周囲を掘り進めます。こうして、土器とトレンチの壁面の土層断面を一緒に撮影したのが右の写真です。

第 14 トレンチの土層断面の精査作業

木製品類出土状態

旧河道の横断面の土層堆積

土層の堆積様子を観察するために、帯状に残した土の壁を平らに削った写真です。

旧河道の河床には、こぶし大～人頭大の丸い石を含んだ粗い砂の層があります。この上に、黒褐色の細かい砂～粘土層が堆積し、この層の中に遺物が含まれています。さらに、この上は、明青灰色の細かい砂層や黒褐色の砂質粘土層で覆われています。

旧河道全景［東から］

この旧河道の河床には、人頭大～拳大の丸い石を含んだ粗い砂層が堆積していますが、これは土器が埋没する前に形成されたものです。その後、川の活動により堆積と侵食を繰り返した後、ゆるやかな水流により、砂～粘土によってこの河道は埋没していきました。

土器などは、表面がとくに摩滅したものがなく、それほど遠くから川の中を移動してきたとは考えられません。

2003 年に夕川対岸の同じ延命寺遺跡の一部を発掘調査したときには、古墳時代の前期の集落跡が見つかっています。

この集落と旧河道との距離は、約 100 mであり、ここに暮らした人々に関係する遺物と考えられます。川岸で祭祀を行った可能性もありますが、玉類など祭祀専用の道具は今回出土していないので、確証がありません。何らかの理由で、土器を川辺に置いたり、投げ込んだものと思われます。いずれにしても、土器は古墳時代前期（約 1600 年前）ものばかりであり、この旧河道が埋没したのは古墳時代前期と考えられます。

序

この報告書は、山梨県土木部による西関東連絡道路建設事業に先立って実施された延命寺遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

延命寺遺跡の名称は字名「延命寺」に因むもので、現在は延命寺という寺院はありません。しかし、江戸時代に編纂された地誌『甲斐国志』によると、調査地点北方の尾根上にある金桜神社に付属する寺院として「延命寺」が 16 世紀末まであったとされています。今回の調査では、寺院に関連する遺構・遺物について慎重に調査を行いましましたが、寺院に関わるものは発見できませんでした。

しかし、発掘調査の結果、現在も遺跡の中央を東西に横断している夕川の古い流路と思われる旧河道を確認しました。この旧河道の調査を進めたのは、残存状態の良好な古墳時代前期の土器や木製品がまとまって出土したからです。出土した土器は、いずれも古墳時代前期（約 1600 年前）のものであり、しかもほぼ完全な形のままのものを含む 26 点が集中的に出土しました。これらの土器が重要なのは、川の堆積層中から出土したのですが、特別に磨耗の痕跡がないことです。つまり、非常にゆっくりした川の堆積環境では、土器がほとんど磨耗せずに埋没することを示しているからです。

平成 15 年に山梨市教育委員会と帝京大学山梨文化財研究所によって同じ延命寺遺跡内の約 100 m南の地点の発掘調査が行われ、古墳時代前期の 3 軒の住居跡が見つかっています。今回の出土した遺物は、これらの人々の暮らしに関わるものと考えられます。

本書および出土遺物・発掘調査資料が、山梨市を中心とする地域の歴史解明、あるいは地域学習の糧となれば幸いです。

末筆ではありますが、延命寺遺跡の発掘調査および報告書作成にあたり、さまざまな協力をいただいた機関および関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成 20 年 3 月 31 日

山梨県埋蔵文化財センター
所長　末木　健

目 次

延命寺遺跡の概要
序
目次
例言・凡例
第１章　調査経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1
　第３節　整理調査の経過 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の方法と成果 …… 6
　第１節　調査方法 …… 6
　第２節　基本層序 …… 6
　第３節　遺構 …… 9
　第４節　遺物 …… 10
第４章　まとめ …… 21

図版目次

第１図　延命寺遺跡および周辺遺跡位置図（1/25000） …… 3
第２図　延命寺遺跡範囲および周辺遺跡位置図（1/4000） …… 4
第３図　基本層序（タテ 1/40、ヨコ 1/100） …… 6
第４図　トレンチおよび調査範囲設定図（1/500） …… 7
第５図　発掘調査範囲図（1/200） …… 8
第６図　旧河道平面図 …… 11
第７図　調査区西壁および第 5・11 トレンチ土層断面図 …… 12
第８図　第 12・14 トレンチ土層断面図（タテ 1/20、ヨコ 1/40） …… 13〜14
第９図　出土遺物実測図［土器］(1) …… 15
第 10 図　出土遺物実測図［土器］(2) …… 16
第 11 図　出土遺物実測図［土器］(3) …… 17
第 12 図　出土遺物実測図［木製品］(1) …… 18
第 13 図　出土遺物実測図［木製品］(2) …… 19

表目次

遺物観察表 …… 20

例　言

1．　本書は、山梨県山梨市落合字延命寺 180 外に所在する延命寺遺跡の発掘調査報告書である。
2．　発掘調査は、西関東連絡道路建設に先立って、山梨県教育委員会が山梨県土木部からの委託を受け、山梨県土木部の経費負担により、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
3．　本書に係わる発掘調査および整理作業についての山梨県土木部との調整は、山梨県教育委員会学術文化財課が担当した。
4．　発掘調査は平成 18 年（2006）5 月 8 日～ 6 月 5 日の期間に行った。
5．　整理作業は山梨県埋蔵文化財センターにおいて、基礎的整理を平成 18 年 12 月 1 日から平成 19 年 3 月 30 日に、本格的整理作業を平成 19 年 5 月 7 日から平成 20 年 3 月 31 日の期間に行った。
6．　本書の執筆・編集は山梨県埋蔵文化財センターの村石眞澄・大木丈夫が担当した。
7．　本書に掲載した発掘現場の写真は、村石眞澄・芦澤昌弘が撮影した。
8．　本書に掲載した整理作業および遺物の写真は、村石眞澄・大木丈夫が撮影した。
9．　出土した木製品の保存処理は、帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
10．　本調査に係わる資料（出土品･写真･図面･他の記録類は）山梨県埋蔵文化財センターが一括保管している。
11．　発掘調査および報告書作成にあたっては、下記の組織・個人からご助言・ご協力を賜った。ご芳名を記し、深く感謝申し上げる。

組織

山梨市教育委員会

個人

櫛原功一、佐々木満、三澤達也

凡　例

1．　遺構・遺物の縮尺は各図中に示した。
2．　方位は図中に座標北で示した。
3．　土層断面図は、横軸（水平軸）の縮尺を圧縮して作図した。その縮尺値は各図に示した。また標高はメートル単位で示した。
4．　人為的に構築された遺構は検出されず、発掘調査も短期間あったため、グリッドを設定しなかった。公共座標値は、第４図トレンチおよび調査区設定図中の測量点の値を世界測地系座標と日本測地系座標（旧座標）で示した。
5．　遺物の注記の略号は、延命寺遺跡は「エンメイジ」、トレンチ名は算用数字の後に「T」、平板測量で取り上げた遺物番号は算用数字で示した。個々の注記略号は遺物観察表に掲載した。
6．　実測対象とした土器の抽出は、全体の 1/3 以上残存している個体、口縁部・底部など特徴的な形状が図示できるものを選択した。木製品については、加工跡が明瞭な遺物を対象とした。
7．　遺物の計測値は、土器については、観察表に口径・器高・底径を示した。口径は口唇の直径とした。現存値の場合は括弧を付した。
8．　既報告文献

山梨市教育委員会他　2005 『延命寺遺跡』 山梨市文化財調査報告書　第９集

山梨県教育委員会　2006 『山梨県県内分布調査報告書』平成 17 年「西関東連絡道路建設事業［山梨市落合］、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 240 集、p36-37

山梨県教育委員会　2007 『年報』23　2006 年度（平成 18 年度)、「1-8 延命寺遺跡」、p28-29

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経緯

延命寺遺跡は、平成 15 年（2003）に山梨厚生病院授産施設建設に伴い、山梨市教育委員会と㈶山梨文化財研究所によって発掘調査が実施され、古墳時代前期・平安時代・近現代の遺構・遺物などについて調査成果が報告されている。

こうした周知の遺跡である延命寺遺跡が、西関東連絡道路建設予定地内に存在するため、平成 17 年 11 月 21・22・24 日および 12 月 21･22 日に試掘を行ったところ、古墳時代の土器片が大量に出土し、遺構が存在する可能性が高いことが判明した（山梨県教育委員会 2006）。これにもとづき、事業主である西関東道路建設事務所と学術文化財課と山梨県埋蔵文化財センターの 3 者で協議を行い、本調査を実施することとなった。

そこで山梨県埋蔵文化財センターが、平成 18 年（2006）5 月 8 日から 6 月 5 日にかけて発掘調査を実施した。また、室内のおける出土品や図面などの整理作業については、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。基礎的整理は平成 18 年 12 月 1 日から平成 19 年 3 月 30 日に、本格的整理作業は平成 19 年 5 月 7 日から平成 20 年 3 月 31 日の期間に行った。

これらに要する発掘調査と報告書刊行を含めた整理作業の経費は、山梨県土木部が負担した。

以上の延命寺遺跡の発掘調査に関わる法的手続きは次のとおりである。

平成 18 年 5 月 9 日　文化財保護法第 99 条に基づく発掘通知を山梨県教育委員会教育長へ提出（教埋文第 88 号）

平成 18 年 6 月 9 日　遺失物法第 13 条に基づく埋蔵文化財の発見通知を日下部警察署長に提出（教埋文第 206 号）

第２節　発掘調査の経過

試掘調査の結果から遺構・遺物が存在する範囲が限定されることが予測されため、本調査はまずトレンチ調査によって、遺構・遺物が集中する範囲を把握することから着手した。5 本のトレンチ調査により、遺物の集中する範囲が調査対象範囲中の南西部分に限定できることが確認できたため、この南西部分の表土を全面的に剥ぎ、調査を実施した。

この南西部分では、土器と木製品類が集中的に出土した。全体が完全に残っている台付甕形土器（煮炊きに使われたもの）は、微細な破片までその場に残っており、出土した場所で土圧により割れたものと推定できるものであった。また、他にも残存状態が良好な土器、さらに木製品と思われる木片が多く出土し、集落跡が近くに存在する可能性が高いと判断し、精査を行った。しかし、遺物を包含する堆積層は河川堆積物で構成されており、住居跡などの遺構を確認することができなかった。この延命寺遺跡付近は、明治時代以前の笛吹川本流の氾濫原にあたり、この付近にあった集落が流され、土器などの遺物だけが残された、あるいは何らかの理由で遺物を投げ入れたことが想定される。土器が出土した下部には、大礫を含む砂礫層が広がっているが、詳細に観察すると土器を包含しているのは、小礫から大礫を含む河川堆積物の上層にあたる細砂からシルト層であった。ゆっくりした流れの川の堆積物中に土器が埋没したものと考えられる。

調査組織

調査主体　　山梨県教育委員会

調査機関　　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　村石眞澄、芦澤昌弘

発掘作業作業員　雨宮久仁子、安田絹子、安田敏男、風間由美子、奥山宗石、櫛原ゆかり、小泉紀子、沢登淳子、土屋常子、手塚理恵、名取婦美子、広瀬候子、深澤さつき、皆川勇貴

第３節　整理調査の経過

室内における出土品や図面などの整理作業については、土器などの出土品の水洗・注記と分類ほかの基礎的整理作業を平成 18 年 12 月 1 日から平成 19 年 3 月 30 日の期間で実施した。平成 19 年 5 月 7 日から平成 20 年 3 月 31 日の期間に、分類・観察に基づき出土品の評価を行い、実測図・トレース図を作成した。さらに発掘調査において、現地で作成した遺物出土位置図などを取りまとめて調査成果を示す、発掘調査報告書を刊行する本格的整理作業を実施した。

出土した古墳時代前期の木製品の中で、遺存状態の良好な 5 点については、実測図作成および写真撮影後に、ＰＥＧ法による保存処理作業を帝京大学山梨文化財研究所に業務委託して実施した。

調査組織

調査主体　　山梨県教育委員会

調査機関　　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　平成 18 年度　村石眞澄、芦澤昌弘

　　平成 19 年度　村石眞澄、大木丈夫

整理作業員　川住たまみ、土屋常子、西山和子、樋口久子、渡辺麗子（平成 18・19 年度）

引用文献

山梨市教育委員会他　2005 『延命寺遺跡』 山梨市文化財調査報告書　第 9 集

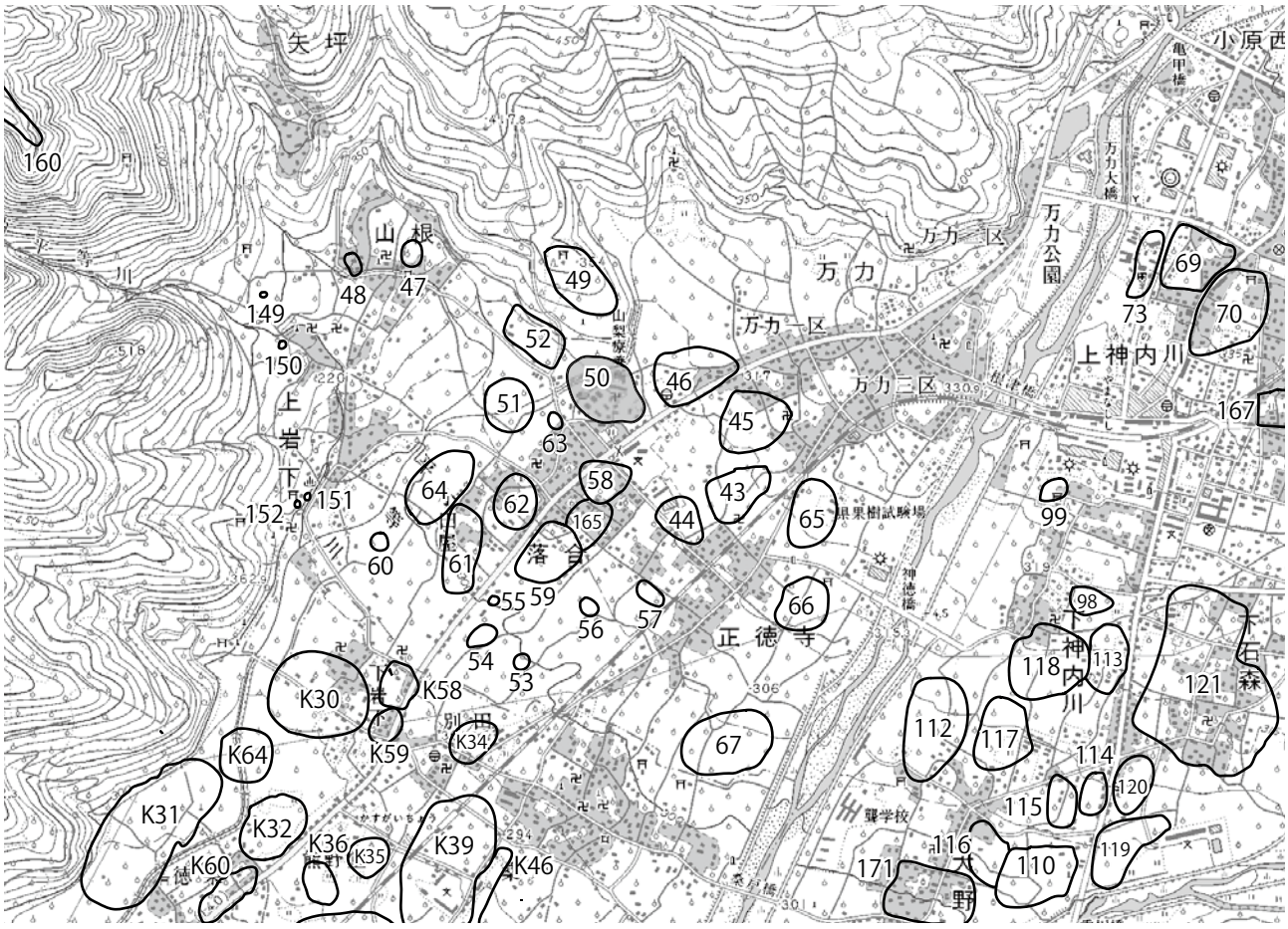
山梨県教育委員会　2006 『山梨県県内分布調査報告書』平成 17 年「西関東連絡道路建設事業［山梨市落合］、山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第 240 集、p36-37

山梨県教育委員会　2007 『年報』23　2006 年度（平成 18 年度）、「1-8 延命寺遺跡」、p28-29

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

延命寺遺跡は、甲府盆地東縁を南西方向に流れる笛吹川の西側の標高 310 m付近に位置する。北西には棚山（1171.0 m）、兜山（913.0 m）、大蔵経寺山（715.6 m）をはじめとする低い山々が連なる。棚山から発する尾根からさらに枝分かれした小尾根のひとつが本遺跡北方に伸びており、小尾根末端の標高 354 m付近に金桜神社があり、この付近は金桜遺跡（49）となっている。今回の調査地点との金桜神社の距離はおよそ 300 mである。



番号	遺跡名	時代	63	三枚地遺跡	平安・中世	150	山寺古墳	古墳
43	間之田東遺跡	平安	64	小武家遺跡	平安・中世	151	天神塚古墳	古墳
44	天神前遺跡	縄文・平安・中世	65	三宮寺遺跡	平安・中世	152	牧洞寺古墳	古墳
45	間之田西遺跡	古墳・平安	66	九ツ塚遺跡	平安・中世	160	御前山の烽火台	中世
46	原ノ前遺跡		67	五躰尊遺跡	平安	165	落合館	中世
47	長田遺跡	縄文	69	平塚遺跡	平安	167	城伊庵屋敷	中世
48	鷹田遺跡		70	塚越遺跡	古墳・中世	171	大野砦	中世
49	金桜遺跡	縄文・平安	98	前田遺跡	平安	172	足原田遺跡	古墳～平安
50	延命寺遺跡	弥生・古墳・平安	99	宮ノ上遺跡	平安	K30	中川田遺跡	平安
51	千原田遺跡	古墳・平安	110	天神前遺跡	縄文・平安	K31	上町田遺跡	弥生・古墳・平安
52	地蔵久保遺跡	平安	112	榎木田遺跡	平安	K32	市道遺跡	平安
53	欠之下遺跡	中世	113	宗高北遺跡	平安	K34	別田北遺跡	平安
54	花桜遺跡	平安・中世	114	宗高南遺跡	弥生・古墳	K35	別田南遺跡	平安
55	落合市道遺跡	平安	115	宗高西遺跡	古墳	K36	熊野北遺跡	古墳・平安
56	正徳寺前山遺跡	平安	116	天神前北遺跡	平安	K39	裏町遺跡	古墳・奈良・平安
57	林際遺跡	平安	117	市道遺跡	平安	K46	加茂西遺跡	古墳・奈良・平安
58	屋敷遺跡	平安・中世	118	杉木遺跡	古墳	K58	信虎誕生屋敷	平安
59	堀之内遺跡	平安	119	雲林遺跡	古墳・平安	K59	菩提山	中世
60	小金田遺跡	縄文	120	宗高東遺跡	縄文	K60	小川奥右エ門屋敷	中世
61	半座池遺跡	古墳・平安	121	屋敷添遺跡	縄文・平安・中世	K64	西光寺遺跡	
62	田屋之前遺跡	平安	149	観音塚古墳	古墳	K65	横町遺跡	

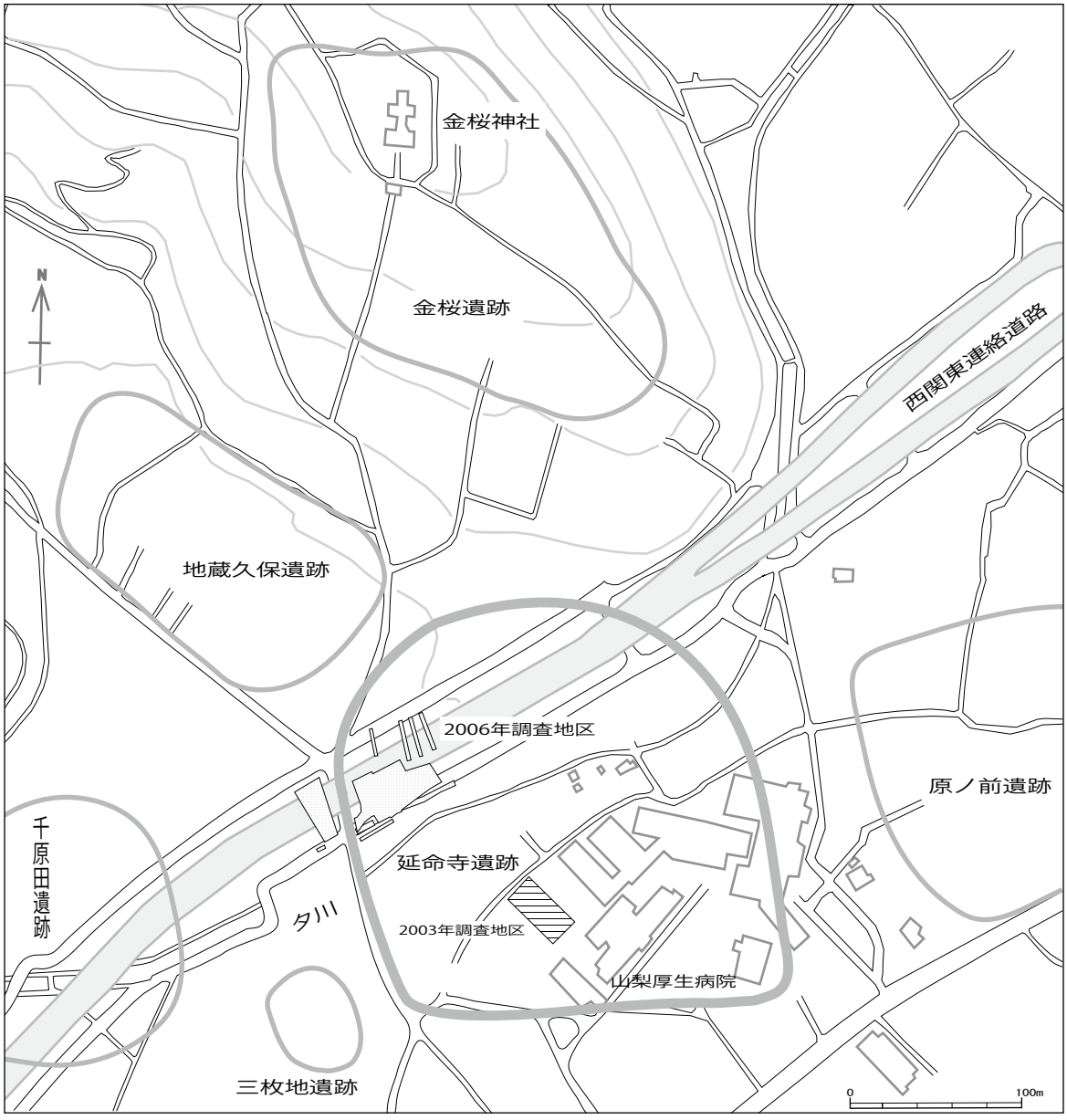
※　番号の頭に K が付いているものは旧春日居町所在の遺跡。

第１図　延命寺遺跡および周辺遺跡位置図（1/25000）

また棚山は小河川を発しており、本遺跡の中央を流れる夕川もこのひとつであり、平等川の支流を構成している。遺跡の立地する地形を概観すれば、甲府盆地の東部を代表する大河川である笛吹川の氾濫原でもある。

夕川と本遺跡の関係をみると、夕川は東から流れ、金桜神社を頂く尾根に突き当たり、回り込むように南に方向を変え、さらに遺跡範囲内で西に向きを変えている。つまり、本遺跡の立地はこの尾根末端が、夕川に接する部分にあたる。この一帯は、河川の影響を強く受ける地形である。しかし、北に尾根を背負っている延命寺遺跡の立地は、背後の急斜面から発する激しい土石流のような水害を受ける可能性が低い土地とみることができる。

現在の土地利用は、モモ・ブドウを中心とした果樹園の間に宅地などが点在しているが、かつてはおもに水田として利用されていた。このことは、大日本帝国陸地測量部発行の２万分の１地形図の表記、遺跡の土層断面の観察から確認することができる。かつての氾濫原であることから伏流水も豊富であり、木製品などが多く残されたものと推定される。（村石眞澄）



第２図　延命寺遺跡範囲および周辺遺跡位置図（1/4000）

第２節　歴史的環境

延命寺遺跡周辺には、多くの遺跡が所在している。今回の調査では、古墳時代前期の遺物が集中的に出土しており、この時代を中心に述べることとする。周辺遺跡については、第１図延命寺遺跡および周辺遺跡位置図に示した。

延命寺遺跡は、すでに平成 15 年、山梨厚生病院授産施設建設に伴い、山梨市教育委員会と㈶山梨文化財研究所により発掘調査が実施されている。平成 15 年の調査地区は、今回の調査地点と夕川を挟んで南側に位置し、同時期の古墳時代前期の住居跡３軒などが検出されている。他に平安時代・近現代の遺構・遺物などが確認されている。

延命寺遺跡の北東にある足原田遺跡は、西関東連絡道路の建設に伴い、平成 15 年から 18 年にかけて山梨県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施され、延命寺遺跡と同時期の古墳時代前期の土器が出土している。また、平安時代後期の住居跡も確認されている。そして、当遺跡の西方には、千原田遺跡（旧中沢遺跡）があり、西関東道路の建設に伴って山梨県埋蔵文化財センターにより発掘調査されている。千原田遺跡も同様に古墳時代前期の遺跡であり、奈良時代の住居跡も検出されている。また、小武家遺跡（旧武家遺跡）も古墳時代前期の遺跡であり、同時期の住居跡１軒と方形周溝墓が発見されている。他に古墳時代の遺跡としては、間之田西遺跡や半座池遺跡が知られている。

本遺跡名とされた字名「延命寺」は、かつて周辺にあった寺院名に因むものである。遺跡北方約 300 ｍの尾根上に金桜神社があり、「延命寺」はこの神宮寺の名前に由来するものと考えられる。しかし、これまでの発掘調査では、寺院に関する遺構は検出されていない。

『甲斐国志』によると、天正 10 年（1582）３月、織田氏が甲斐国へ攻め入った際、金桜神社の社殿は壊され、神主・社僧らは離散したという。そして、延命寺の社僧は、東光寺村（現在の甲府市上一条町）へ逃れ、誓願寺を建立したとされる。しかし、誓願寺は、『甲斐国志』や『寺記』によると武田信虎に由緒を求めており、これを信じるとしたら、天正 10 年以前から存在したことになる。また、誓願寺の山号である大宮山は、金桜神社の別称の大宮権現からきたとの指摘もある。（大木丈夫）

引用文献

山梨県教育委員会他　2004　『中沢遺跡・武家遺跡』　山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 214 集
山梨市教育委員会他　2005　『延命寺遺跡』　山梨市文化財調査報告書　第９集
山梨県教育委員会他　2005　『足原田遺跡』Ⅰ　山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 230 集
山梨県教育委員会他　2007　『足原田遺跡』Ⅱ　山梨県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第 246 集
『大日本地誌体系　甲斐国志』1968　雄山閣

延命寺遺跡遠景（北西から）
［矢印が延命寺遺跡］

西関東連絡道路完成後の調査地点の様子

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査方法

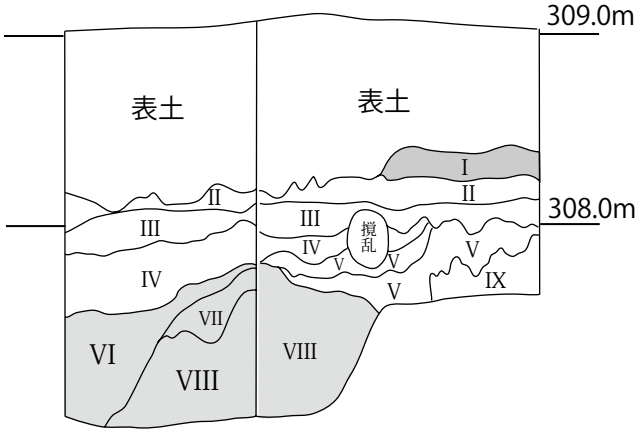
延命寺遺跡の名称は字名「延命寺」に因むもので、『甲斐国志』によれば、この付近に天正 10 年（1582）に織田軍が甲斐国へ攻め入るまで「延命寺」があったとされている（第２章）。今回の調査では、寺院に関連する遺構・遺物について留意したが、寺院に関わるものは確認できなかった。

試掘調査では、第１から第９トレンチまでの９本のトレンチ調査を実施した（第４図）。その結果、第５トレンチと第７トレンチで遺物が発見されたが、他のトレンチでは遺構遺物ともに検出されなかった。

本調査では、試掘調査の結果から遺構・遺物が存在する範囲が限定されることが予測されため、まずトレンチ調査によって、遺構・遺物が集中する範囲を把握することから着手した。第 11 トレンチから第 16 トレンチまでの６本のトレンチ調査を実施し、遺物の集中する範囲が調査対象範囲中の南西部分に限定できることが確認できたため、第４図に示す「発掘調査範囲」の表土を全面的に剥ぎ調査を進めた。

表土を剥ぎ取ると地山土層がおおまかに３分割されることが明らかとなった。第５図発掘掘範囲図に示すように、調査範囲のすぐ南側をほぼ東西に流れる夕川流路方向に沿って、南から黒褐色砂質シルト層が広がる範囲、そして大円礫～中円礫混じりにぶい黄粗砂～中粒砂層の範囲、さらに北側に黒褐色砂質土層の範囲の３者である。この３者の地山の中で、遺物が出土したのは、夕川に最も近い黒褐色砂質シルト層が広がる範囲であった。そこで、試掘調査で設定した第５・第７トレンチを手始めに、第 12・13・14・15 トレンチ付近の掘り下げを行った。さらに遺物の出土範囲がトレンチ間に広がっていることが明らかになってきたため、トレンチ間を順次掘り進め、拡張したのが第 17・18・19・20 トレンチとした範囲である。最終的に調査した旧河道部分を、第５図に「旧河道調査範囲」として示した。

グリッドについては、人為的に構築された遺構は検出されず、発掘調査も短期間あったため、設定しなかった。公共座標値は、第４図トレンチおよび調査区範囲設定図中の測量点 No279 ～ 285 の数値を、世界測地系座標と日本測地系座標（旧座標）で図中に表示した。



調査区西壁

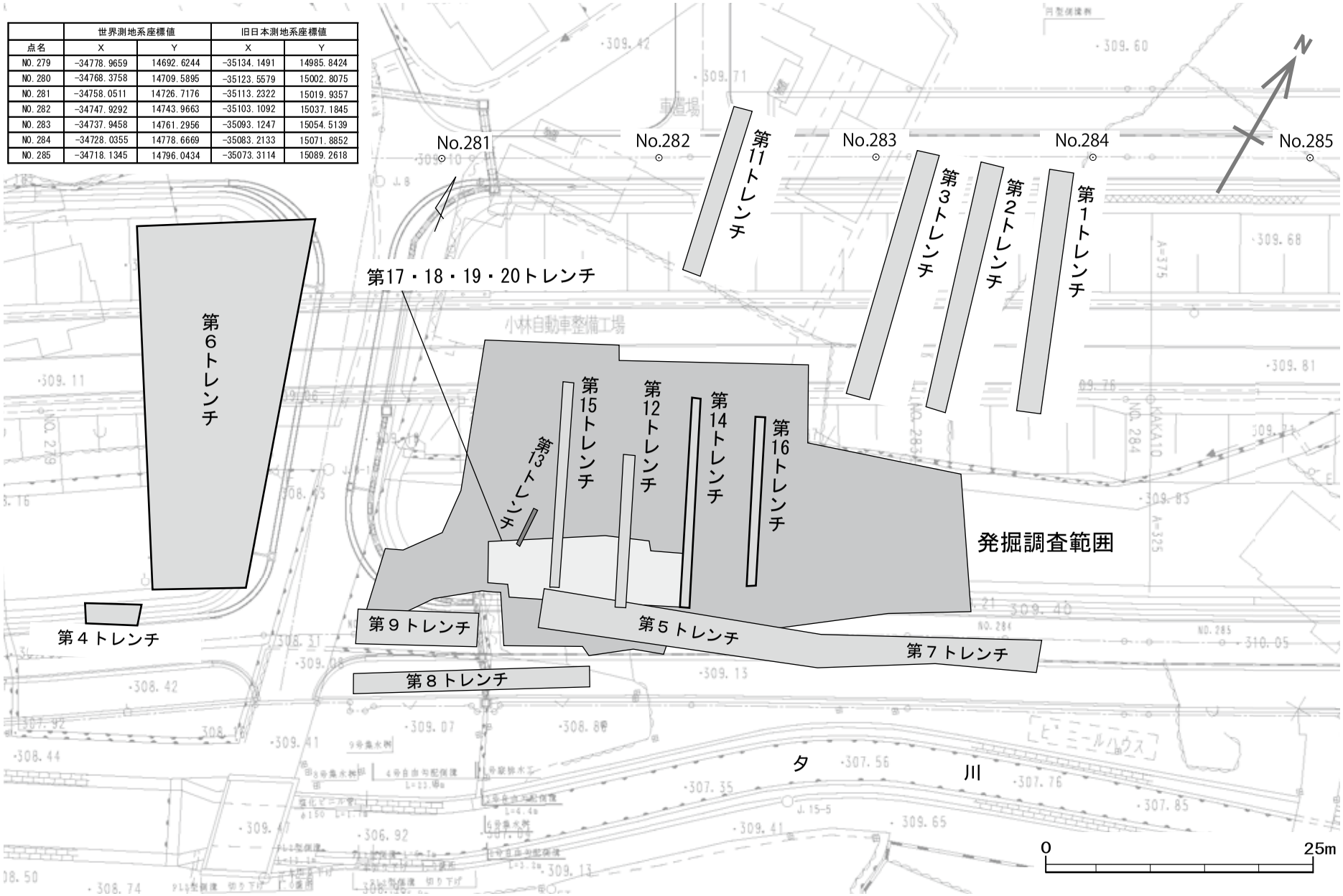
I. 褐灰(7.5YR4/1)砂質シルト層 【水田耕作土】
II. 明褐(7.5YR5/8)砂質粘土層
III. 灰黄褐(10YR4/2)砂質粘土層
IV. 褐灰(10YR4/1)砂質シルト層　部分的に灰白の細砂を塊状に含む。
V. 黒褐(10YR3/1)砂質シルト層
VI. 黒色(10YR2/1)砂質粘土層と灰白(10YR8/1)細砂層との互層　ラミナ顕著、土器片・炭化粒５～８mmを含む。【河川堆積層】
VII. 褐灰細砂混じり黒褐(10YR3/1)砂質粘土層 【河川堆積層】
VIII. 黒(10YR2/1)砂質粘土層と黄褐(10YR5/6)細砂層の互層　ラミナ顕著、7層と類似しているが、これに切られている。【河川堆積層】
IX. 明褐(10YR6/6)シルト質中粒砂層

第３図　基本層序（タテ 1/40　ヨコ 1/100）

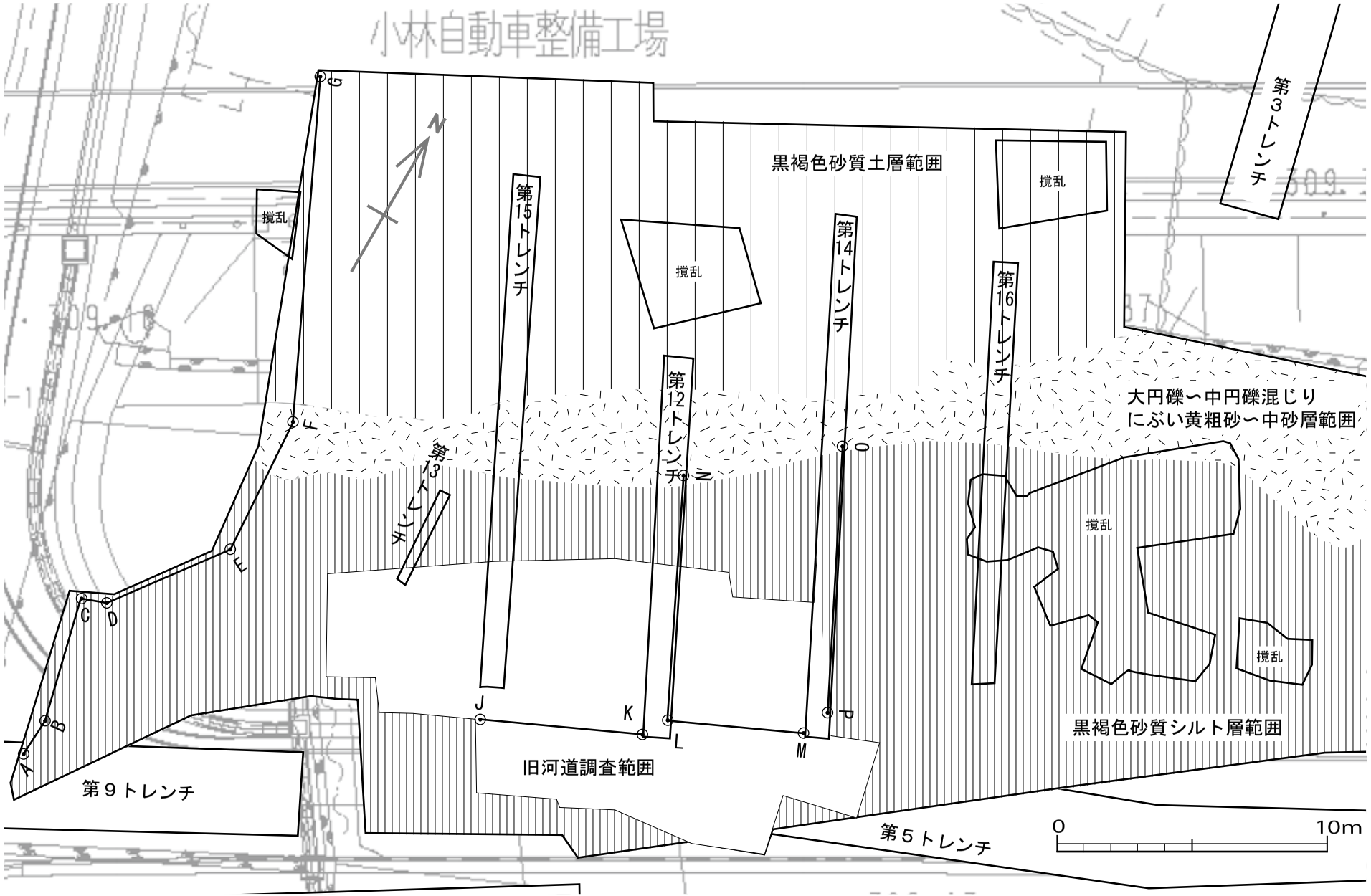
第２節　基本層序

延命寺遺跡の土層堆積は、基本的に河川の影響を強く受けた様相を示している。調査区西壁の一部を基本的な層序として図示し（第３図）、この部分のカラー写真をあらましに掲載した。表土の直下のⅠ層は、堆積構造がほとんど観察できない水田耕作土である。遺跡付近は、現在では果樹地帯となっているが、大日本帝国陸地測量部発行の２万分の１地形図の表記にあるように、明治時代には水田として利用されており、これに関連した堆積層と考えられる。II 層（明褐色砂質粘土層）と III 層（灰黄褐色砂質粘土層）についても、堆積構造がなく酸化鉄を多く含むことから、旧水田耕作

	世界測地系座標値		旧日本測地系座標値	
点名	X	Y	X	Y
NO.279	-34778.9659	14692.6244	-35134.1491	14985.8424
NO.280	-34768.3758	14709.5895	-35123.5579	15002.8075
NO.281	-34758.0511	14726.7176	-35113.2322	15019.9357
NO.282	-34747.9292	14743.9663	-35103.1092	15037.1845
NO.283	-34737.9458	14761.2956	-35093.1247	15054.5139
NO.284	-34728.0355	14778.6669	-35083.2133	15071.8852
NO.285	-34718.1345	14796.0434	-35073.3114	15089.2618



第４図　トレンチおよび調査範囲設定図（1/500）



第５図　発掘調査範囲図（1/200）

土と考えられる。IV 層は部分的に細砂を塊状に含み、河川堆積土層と考えられる。V 層は複数回におよぶ河川の侵食、堆積などを受けて、部分的には変異があるが、基本的には河川堆積層である。VI 層・VII 層・VIII 層は、葉理（ラミナ）構造（粗砂以下の洪水堆積層の中にみられる薄い縞状［通常 10㎜以下］の堆積構造）が顕著な河川堆積層である。これらの堆積層により、平面的に確認した旧河道が埋没されている。この西壁部分では確認していないが、旧河道調査範囲では河床に大円礫～中円礫混じりのにぶい黄色粗砂～中粒砂層を確認している。

とくに注目されるのは、VI 層が土器片・炭化粒の包含層となっていることである。耕作や撹乱の影響を受けておらず、堆積した時期からの堆積構造を保っている。土器はほぼ完形のものを含み、いずれも古墳時代前期のものであり、この層の形成は古墳時代前期と判断した。厳密には、古墳時代前期の遺物包含層を、後世の河川活動により再堆積している状況が想定され、古墳時代前期以降ということなるが、今のところ古墳時代前期以降の遺物が確認できないので、古墳時代前期と考える。IX 層は部分的で明確でないが、VI 層・VII 層・VIII 層の河川堆積層が形成されたときの地山と考えられる。

第３節　遺構

試掘調査では、第 1 から第 9 トレンチまでの 9 本のトレンチ調査を行った（第 4 図）。その結果、第 5 トレンチと第 7 トレンチで古墳時代の土器片が集中的に出土し、他のトレンチでは遺構･遺物ともに検出されなかった。本調査では、遺構・遺物が存在する範囲が限定されることが予測されため、第 11 トレンチから第 16 トレンチまでの 6 本のトレンチ調査によって、遺構・遺物が集中する範囲を把握することから着手した。遺物の集中する範囲が調査対象範囲中の南西部分に限定できることが判明したため、第 4 図に示す「発掘調査範囲」の表土を全面的に剥ぎ、調査をさらに進めた。表土を剥ぎ取ると、地山土層がおおまかに 3 分割されることが明らかとなった。第 4 図発掘掘範囲図に示すように、地山土層は、調査範囲のすぐ南側をほぼ東西に流れる夕川に沿って、南から黒褐色の砂質シルト層が広がる範囲、そして大円礫～中円礫混じりのにぶい黄粗砂～中粒砂層の範囲、さらに北側に黒褐色の砂質土層の範囲の 3 者である。

この 3 者の地山の中で、遺物が出土したのは、夕川に最も近い黒褐色砂質シルト層が広がる範囲であった。そこで、試掘調査で設定した第 5・第 7 トレンチを手始めに、第 12・13・14・15 トレンチ調査を行った。さらに遺物の出土範囲がトレンチ間に広がっていることが明らかになったため、トレンチ間を順次掘り進め拡張し、調査した旧河道部分を第 5 図に「旧河道調査範囲」として示した。

この「旧河道調査範囲」では、土器と木製品類が集中的に出土した。巻頭に出土状況の写真を掲載したＳ字状口縁台付甕（1［遺物番号］）は、微細な破片までその場に残されており、出土した場所で土圧により割れたものと考えられるものである。さらに、この調査地点から夕川を隔て、南へ約 100 ｍの地区を平成 15 年（2003）に発掘調査した際には、古墳時代前期の住居跡が発見されている。そこで、今回の調査範囲にも住居跡が存在する可能性が高いと考え、平面および垂直の土層堆積を精査したが、硬化面や焼土や炭化物の散布範囲や人為的な掘り込みは検出できず、遺構を確認することができなかった。

また延命寺遺跡の名称は、字名「延命寺」に因むもので、『甲斐国志』によれば、この付近に天正 10 年（1582）に織田軍が甲斐国へ攻め入るまで「延命寺」があったとされている（第 2 章）。今回の調査では、寺院に関連する遺構・遺物について留意したが、寺院に関わるものは確認できなかった。平成 15 年の発掘調査地点でも、寺院に関連する遺構・遺物は発見されていない。

今回の調査では、人為的な遺構は確認できなかったが、残存状態の良好な古墳時代前期の土器と木製品が集中的に出土している。遺物包含層は、黒色砂質粘土と黒褐色砂質シルトと灰白細砂層が交互に堆積した互層であった。遺物は先に述べたＳ字状口縁台付甕（1）の他に、台付甕（7）、高坏（17）、小型壺（22）、甑（25）、手捏土器（26）もほぼ完形品であり、これら以外にも残存率の高い個体が出土した。遺構である可能性に留意して慎重に観察したが、遺物を包含している黒色砂質粘土や黒褐色砂質シルトなどの土層は、水中で堆積したことを示す葉理構造をもつものばかりであり、人為的な遺構でなく旧河道と判断した。

そして最終的に、包含層を掘り下げ、巨円礫（256㎜［人頭大］以上）～大円礫（64㎜［拳大］以上）を主体とする旧河道の河床面の広がりを確認した。遺物の出土範囲と、この河床面の広がりはよく対応しており、旧河道を埋没させている堆積層が遺物包含層となっていることを確認した。この対応関係を示すために第6図に遺物出土位置を図示した。

旧河道の規模は、調査範囲内で、河床部分で幅3～4ｍ、標高約307ｍである。この旧河道から南に約9ｍを流れる現在の夕川は、コンクリート護岸となっているが、河床幅は6ｍである（第4図）。規模も近似しており、夕川の古い流路跡と考えられる。

巨円礫～大円礫混じりの粗砂層は、近くから出土した土器もあるが、直接的には土器は含まず、遺物包含層が形成される以前に堆積したものと考えられる。

遺物包含層の堆積環境を考えると、水流により河床で礫を移動させる流力は、中礫（粒径64～4㎜）：1ｍ/秒～30㎝/秒、細礫（粒径4～2㎜）:30㎝/秒～15㎝/秒というデータがあり、礫を含まない細砂～シルト～粘土の堆積層が形成される流速はおよそ1秒間に15～30㎝以下という緩やかな流れで堆積したものと考えられる。また、出土した土器には特別に磨耗の痕跡を見出すことができず、台地上の集落跡から出土する土器と差を認めることができない。このことも、緩やかな水流の中で、土器を含んで、旧河道が埋没していったことを示しているものと考えられる。

第4節　遺物

土器

観察記録と計測値を遺物観察表に掲載した。所属時期は古墳時代前期のものである。

木製品

所見を以下に記し、計測値などを遺物観察表に掲載した。

W01（平板NO.128）

板材であり、両面を丁寧かつ平坦に加工されている。短軸方向に帯状の痕跡が連続している。その幅は4㎜前後を中心として、3～10㎜のものがある。手斧を小刻みに使って、平らな面を削り出した痕跡の可能性がある。しかも、削った痕の高い部分が、使用により摩耗して平坦になっているように観察される。実測図の下端の斜めになった木口面は強く焼け焦げている。また上半にも弱い焼け焦げが見られる。

W02（平板NO.134）

幅広の板材を荒割して角材にしたもの。実測図の片面がほぼ平坦である。また、この面には、幅広であるがW01に観察されるような摩耗した「切削痕」が認められる。

W03（平板NO.135）

幅広の板材を荒割して角材にしたもの。

W04（平板NO.139）

農工具の一部と思われる。舟底状の緩やかに湾曲した凸面をもっている。

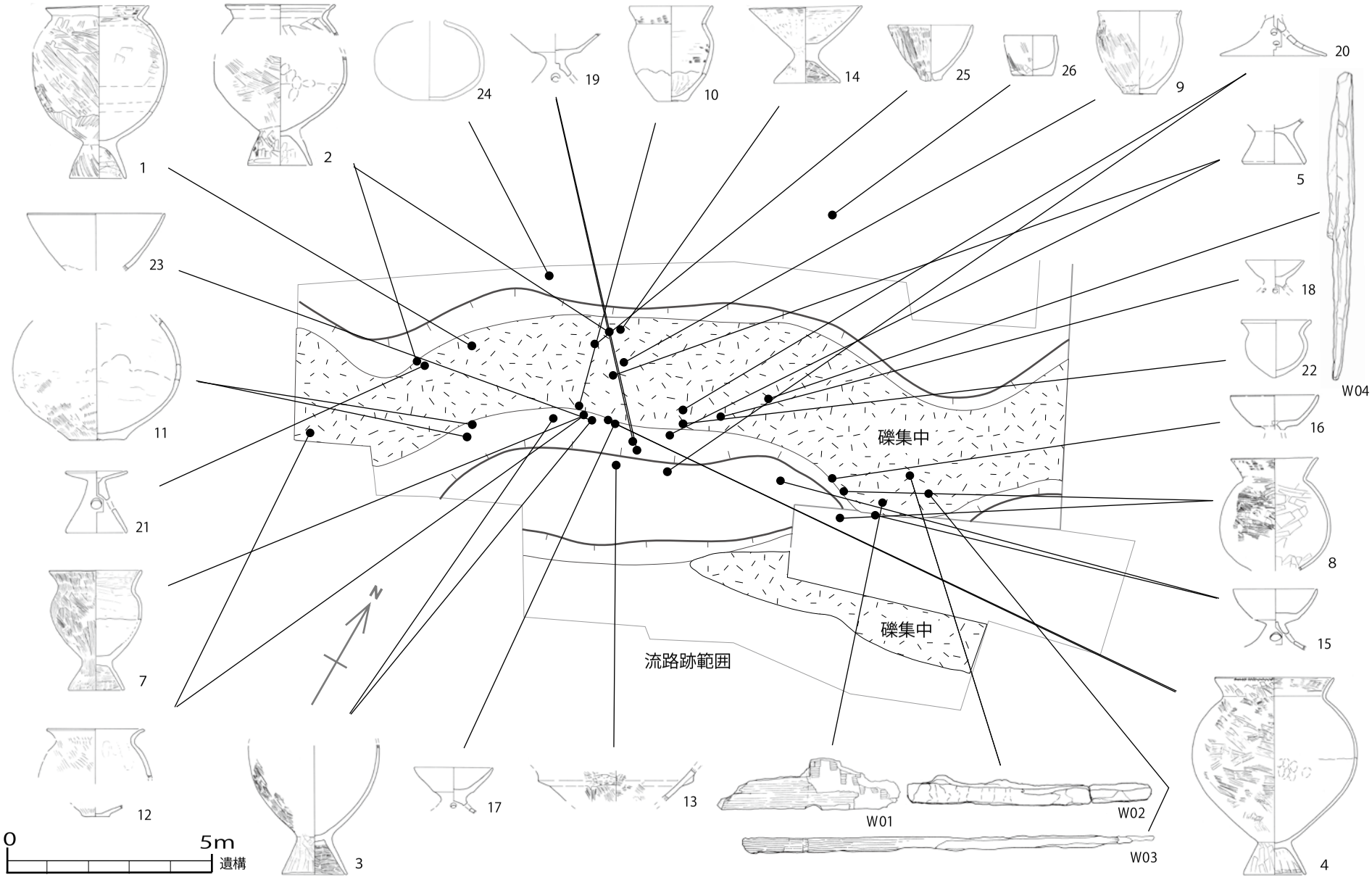
W05（平板NO.無）

実測図の下半は、本来の面が残っている。角材である。

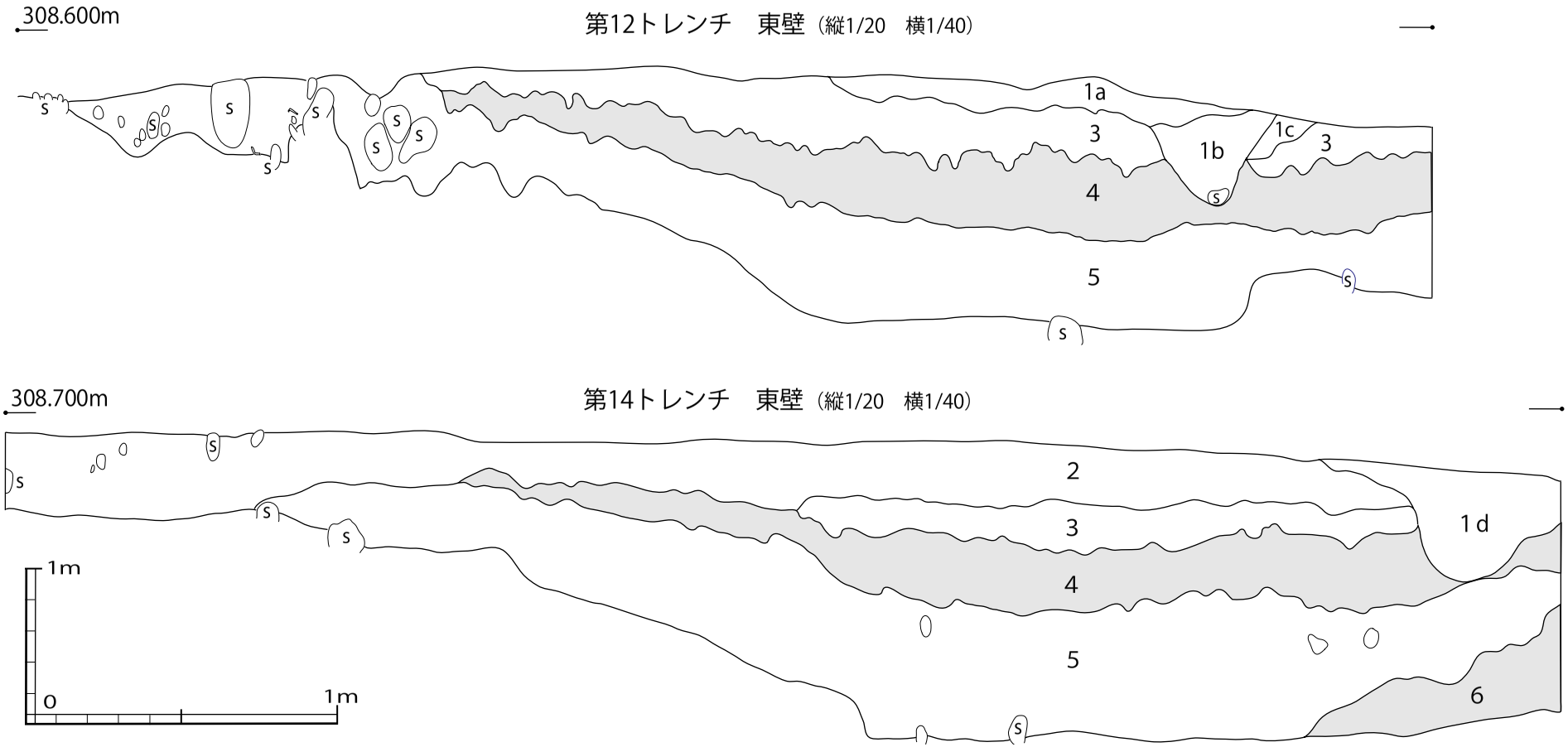
延命寺遺跡で出土した木製品

W02とW03は、板材を荒割した角材であり、W04も農工具を荒割した材である。W05は元から角材である。古材を転用するなどして、荒割の角材がまとまったものと考えられる。護岸のための「しがらみ」あるいは屋根材などの可能性が考えられる。

これら木製品の所属時期は、周辺から出土している土器がいずれも古墳時代前期に属するものであることから、木製品も古墳時代前期と判断した。


礫集中
礫集中
流路跡範囲
N
0
5m
遺構
1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
W01
W02
W03
W04

第 6 図　旧河道平面図

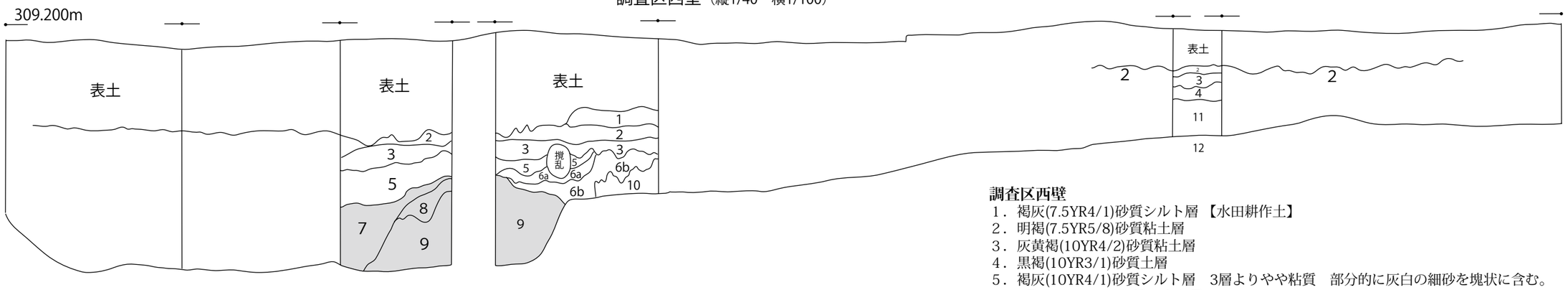


第12・14トレンチ

1 a．黒褐(10YR3/1)砂質シルト層
1 b．淡黄(2.5Y8/4)粗砂層と黄灰(2.5Y6/1)細砂層との互層　ラミナ発達【河川堆積層】
1 c．黒褐(10YR3/1)砂質シルト層　淡黄(2.5Y8/4)中粒砂からなるラミナあり
1 d．黒褐(10YR3/1)砂質シルト層と灰白(N8/0)細粒砂層の互層　ラミナ顕著【河川堆積層】
2．黒褐(10YR3/1)砂質シルト層
3．黒褐(10YR2/1)砂質粘土　金雲母細片が比較的多い
※この付近では全層にわたって金雲母細片を含んでいる。
4．明青灰(5PB7/1)細砂層　ラミナ顕著【河川堆積層】
5．黒(10YR2/1)砂質粘土層と黒褐砂質シルト層と灰白細砂層の互層
ラミナ顕著、土器包含層、炭化粒(５～８mm)・木片などを含む。
【ほとんど流速のない河川堆積層】
6．明青灰(5PB7/1)細砂層　ラミナ顕著【河川堆積層】

第７図　第 12・14 トレンチ土層断面図（タテ 1/20、ヨコ 1/40）

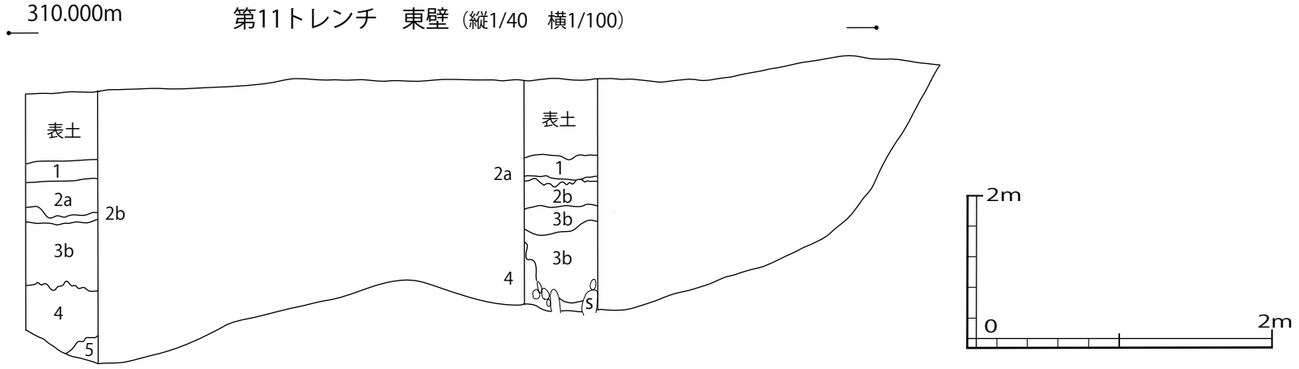
調査区西壁（縦1/40　横1/100）



調査区西壁

1．褐灰(7.5YR4/1)砂質シルト層 【水田耕作土】
2．明褐(7.5YR5/8)砂質粘土層
3．灰黄褐(10YR4/2)砂質粘土層
4．黒褐(10YR3/1)砂質土層
5．褐灰(10YR4/1)砂質シルト層　3層よりやや粘質　部分的に灰白の細砂を塊状に含む。
6a．黒褐(10YR3/1)砂質シルト層
6b．黒褐(10YR3/1)砂質シルト層
7．黒色(10YR2/1)砂質粘土層と灰白(10YR8/1)細砂層との互層　ラミナ顕著、土器片・炭化粒５～８mmを含む。【河川堆積層】
8．褐灰細砂混じり黒褐(10YR3/1)砂質粘土　【河川堆積層】
9．黒(10YR2/1)砂質粘土層と黄褐(10YR5/6)細砂層の互層　ラミナ顕著、7層と類似しているが、これに切られている。【河川堆積層】
10．明褐(10YR6/6)シルト質中粒砂層
11．大円礫～小円礫混じりにぶい黄(2.5YR6/3)粗～中粒砂層
12．黒褐(7.5YR3/2)砂質土　灰白(2.5Y7/1)中粒砂を塊状に含む。

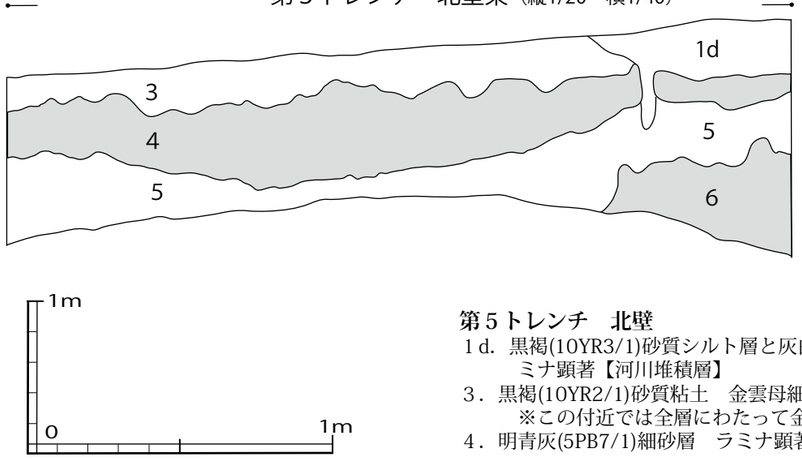
310.000m　第11トレンチ　東壁（縦1/40　横1/100）



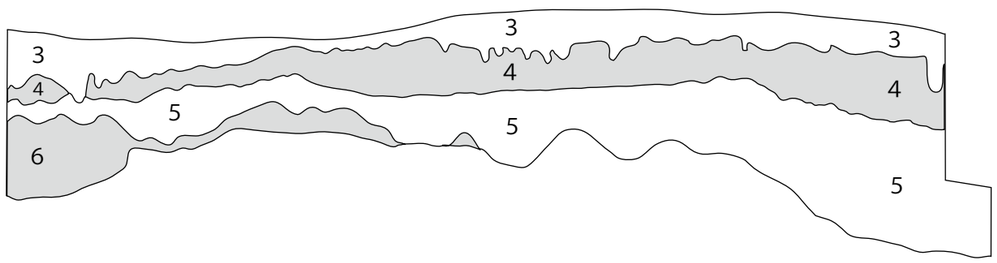
第11トレンチ

1．黒(N2/0)シルト層　【水田耕作土】
2a．灰(7.5Y4/1)砂質シルト層　2b層が酸化して変色したものと思われる。
2b．褐(10YR4/6)砂質シルト層
3a．黒褐(10YR3/1)砂質シルト層　3b層のラミナ構造が失われた層
4．灰白(7.5Y7/1)中粒砂層
5．巨円礫～小円礫混じり灰(7.5Y6/1)粗砂層

308.500m　第５トレンチ　北壁東（縦1/20　横1/40）



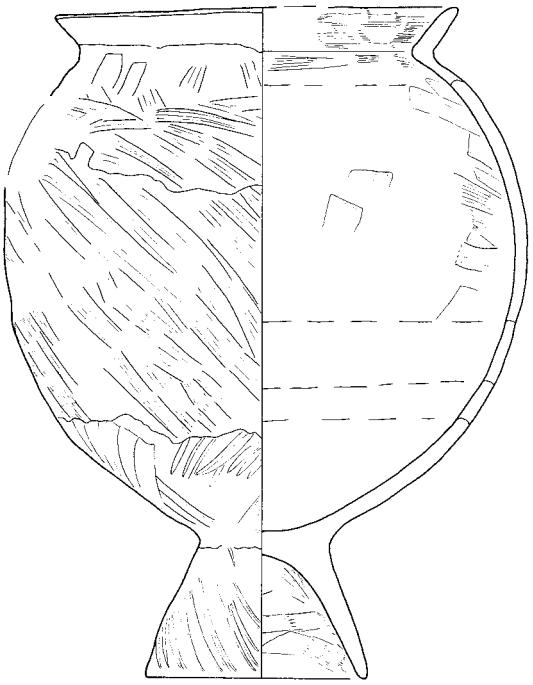
308.500m　第５トレンチ　北壁西（縦1/20　横1/40）



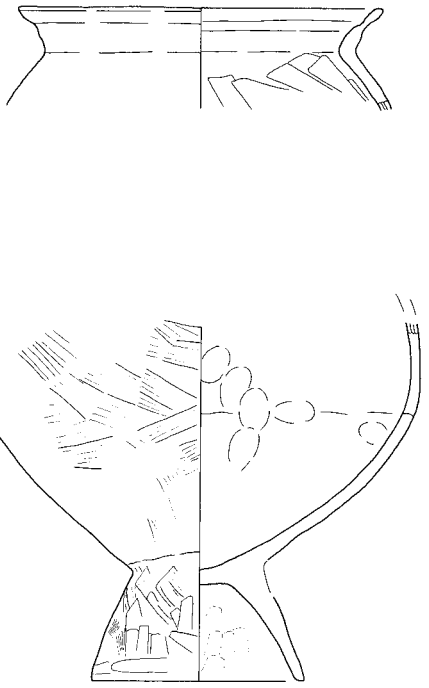
第５トレンチ　北壁

1d．黒褐(10YR3/1)砂質シルト層と灰白(N8/0)細粒砂層の互層　ラミナ顕著【河川堆積層】
3．黒褐(10YR2/1)砂質粘土　金雲母細片が比較的多い
※この付近では全層にわたって金雲母細片を含んでいる。
4．明青灰(5PB7/1)細砂層　ラミナ顕著【河川堆積層】
5．黒(10YR2/1)砂質粘土層と黒褐砂質シルト層と灰白細砂層の互層　ラミナ顕著、土器包含層、炭化粒(５～８mm)・木片などを含む。【ほとんど流速のない河川堆積層】
6．明青灰(5PB7/1)細砂層　ラミナ顕著【河川堆積層】

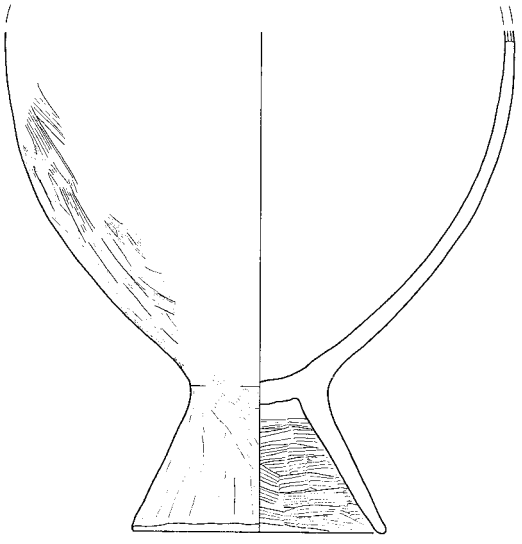
第８図　調査区西壁および第５・11トレンチ土層断面図



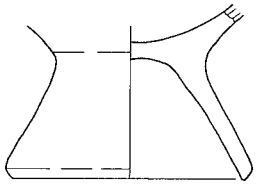
1



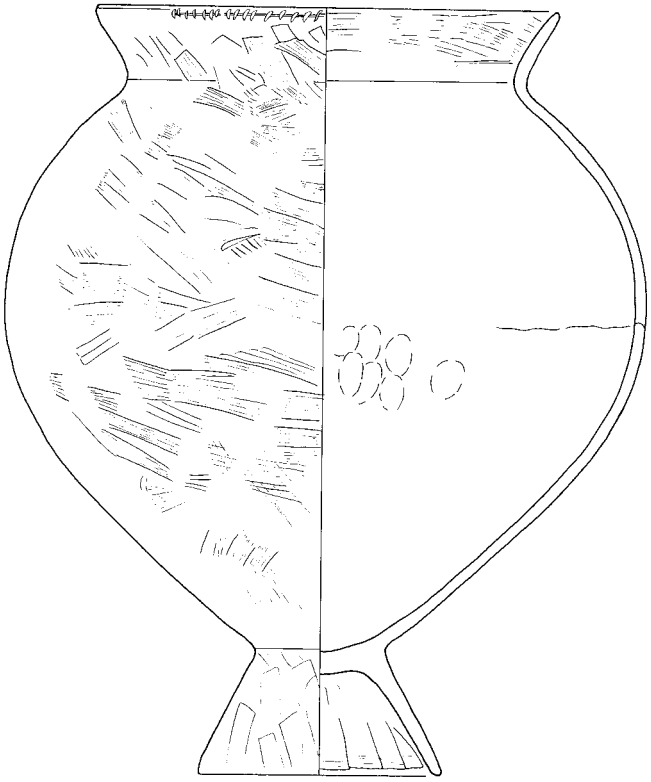
2



3

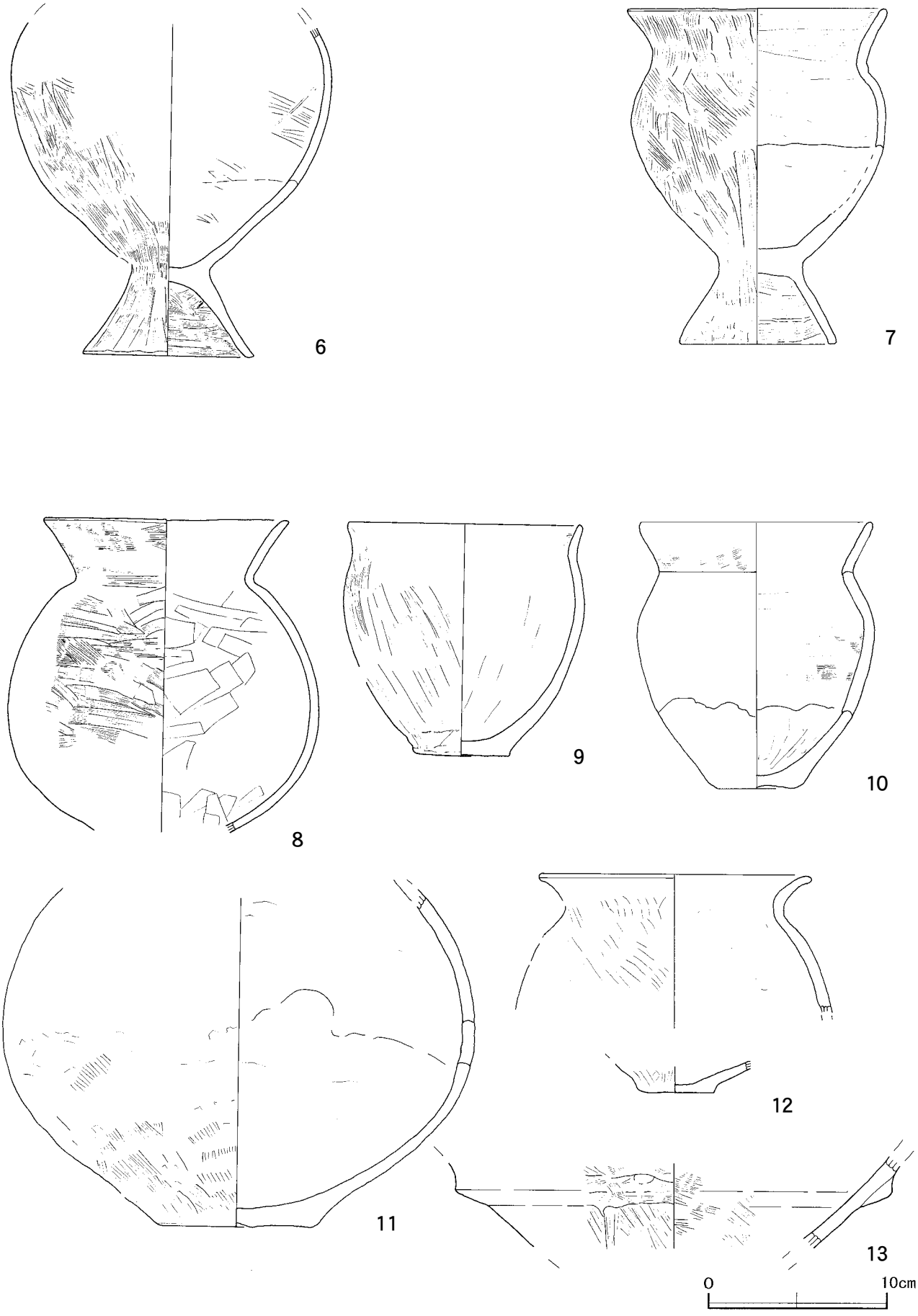


5

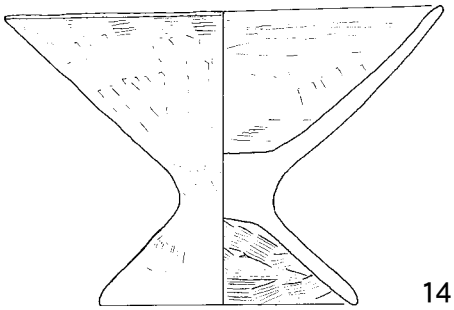


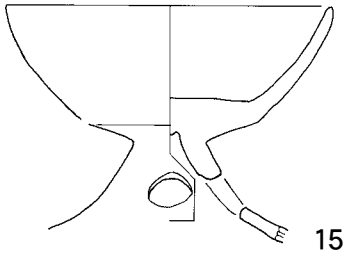
4

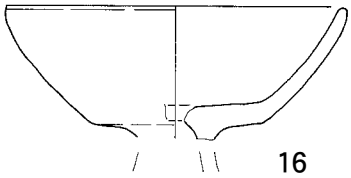
第９図　出土遺物実測図［土器］(1)

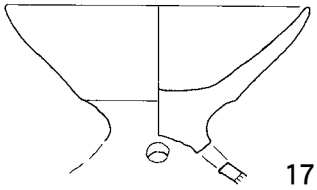


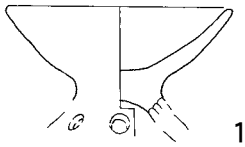
第 10 図　出土遺物実測図［土器］(2)

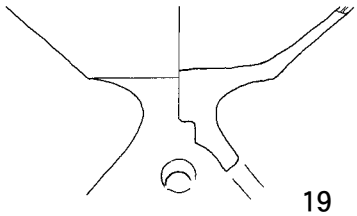

14

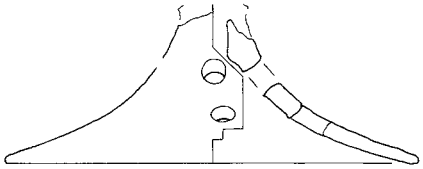

15

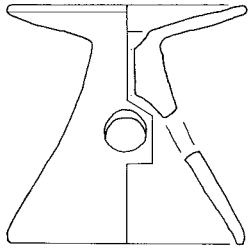

16

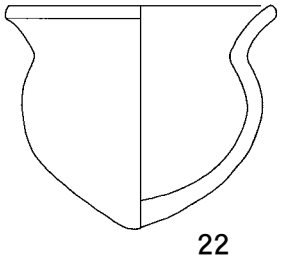

17

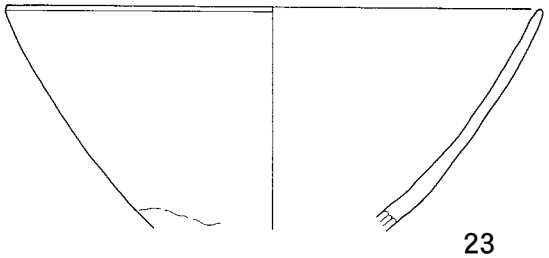

18

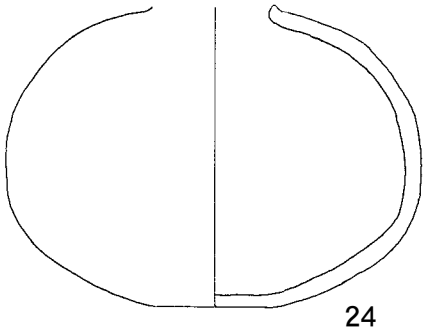

19

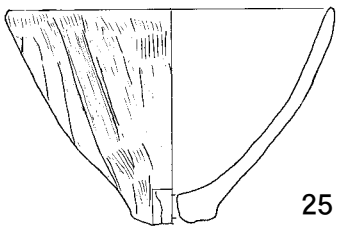

20

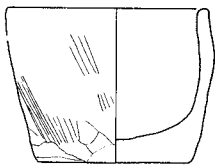

21


22

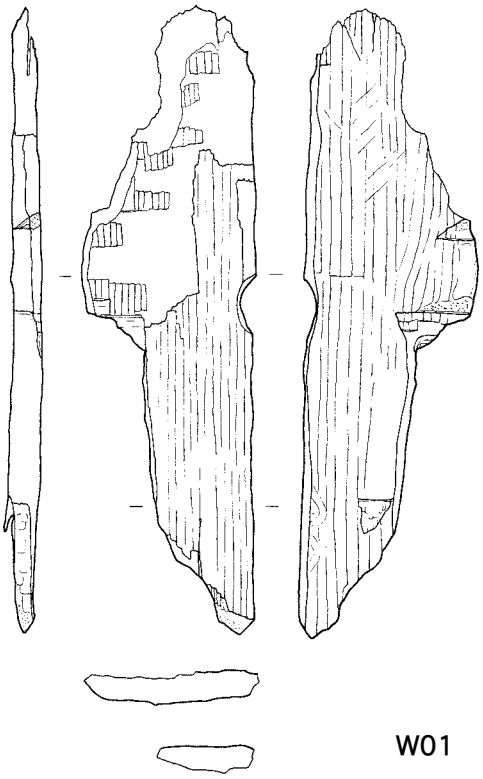

23

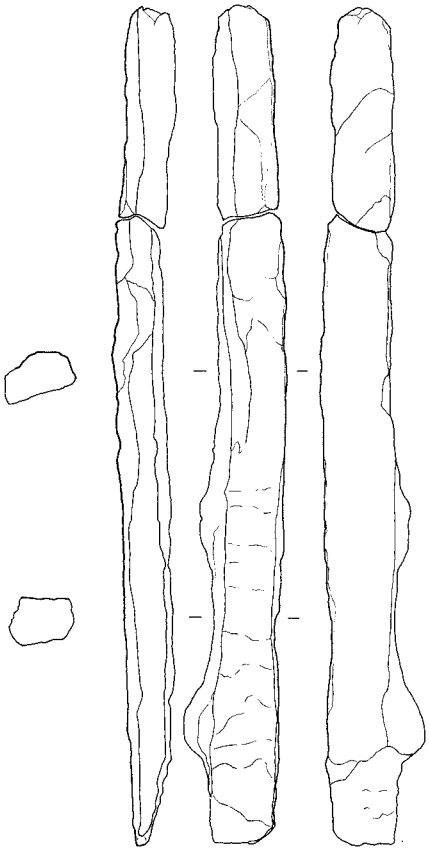

24


25

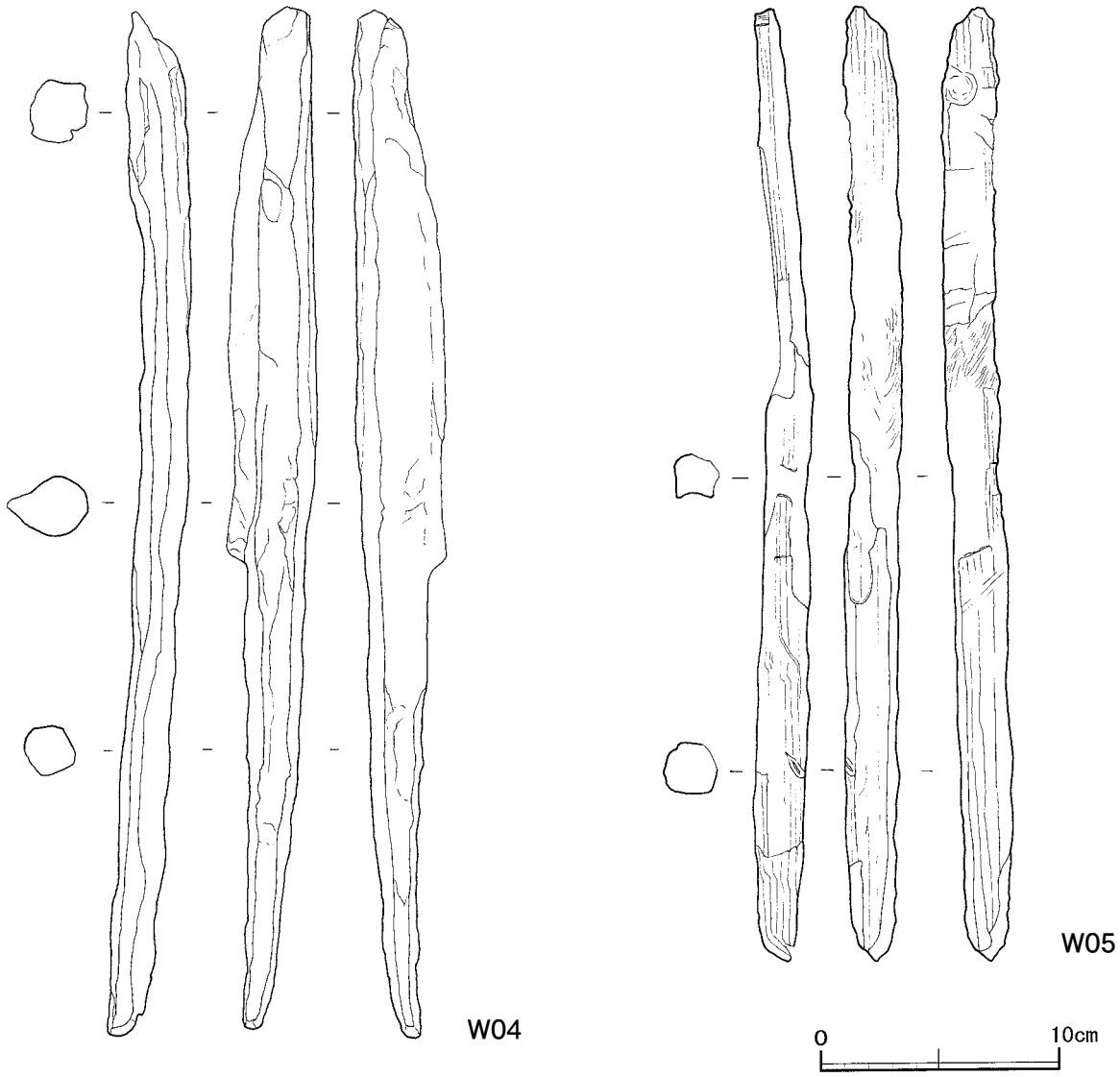

26

第 11 図　出土遺物実測図［土器］(3)





第 12 図　出土遺物実測図［木製品］(1)



第 12 図　出土遺物実測図［木製品］(2)

遺物観察表

図版	遺物番号	注記	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	技法・形態の特徴	胎土	色調	焼成	備考
第９図	1	エンメイジ 80	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	15.9	26.7	8.6	95	口縁は内外面ナデ、胴部内面はミガキ		明赤褐 5YR5/6	良	胴部上半にスス
第９図	2	エンメイジ 105・124	土師器	Ｓ字状口縁台付甕	14.4	—	8.4	50	口縁は内外面ナデ、胴部内面はミガキ		赤褐 5YR4/6	良	
第９図	3	エンメイジ 93・96	土師器	台付甕	—	(19.8)	9.8	40			明褐 7.5YR5/8	やや良	
第９図	4	エンメイジ 100・121	土師器	台付甕	18.0	30.4	9.6	70	胴部内面はミガキ		にぶい黄褐 10YR5/4	良	胴部上半にスス
第９図	5	エンメイジ 68・102	土師器	台付甕脚部	—	(6.9)	9.3	10		赤褐粒子	にぶい橙 7.5YR6/4	不良	
第 10 図	6	エンメイジ 19T	土師器	台付甕	—	(18.2)	9.3	40	胴部内面はミガキ		明赤褐 5YR5/6	良	胴部上半にスス
第 10 図	7	エンメイジ 125	土師器	台付甕	14.0	18.5	8.6	80	胴部内面はミガキ		明赤褐 5YR6/6	良	
第 10 図	8	エンメイジ 116・119・20T・H17 シクツ５トレ	土師器	小型甕	13.6	(17.2)	—	70	胴部内面はミガキ		にぶい黄褐 10YR5/4	良	胴部上半にスス
第 10 図	9	エンメイジ 103	土師器	甕	12.6	12.7	5.6	50	胴部内面はていねいなミガキ		橙 5YR6/6	良	
第 10 図	10	エンメイジ 95	土師器	甕	12.5	14.8	4.4	60	口縁内外は横ナデ		橙 7.5YR6/6	不良	
第 10 図	11	エンメイジ 77・78・18T・19T	土師器	甕	—	(19.4)	8.4	40	胴部内面はミガキ		にぶい黄橙 10YR7/4	やや良	
第 10 図	12	エンメイジ 85・97	土師器	甕	14.8	—	4.2	20		赤褐粒子	赤褐 5YR4/6	やや良	
第 10 図	13	エンメイジ 83・12T と 18T 間・19T・19Tpit	土師器	有段口縁壺の一部	(24.6)	(5.1)	—	5		赤褐粒子	灰黄褐 5YR5/2	良	
第 11 図	14	エンメイジ 106	土師器	高坏	16.9	11.6	10.0		外面全面はハケ目上からミガキ、坏部内面はていねいなミガキ	灰白粒子	橙 5YR6/7	良	赤彩が部分的に残存
第 11 図	15	エンメイジ 112・117・20T・シクツ５トレ	土師器	高坏	12.8	(9.3)	—	70	脚部に３孔	赤褐色粒子	浅黄橙 7.5YR8/4	不良	
第 11 図	16	エンメイジ 115	土師器	高坏	13.4	(5.3)	—	30	内面はていねいなミガキ		にぶい赤褐 5YR5/4	不良	見込中央に穿孔（0.7 ～ 0.9cm）あり
第 11 図	17	エンメイジ 121	土師器	高坏	11.8	(7.1)	—	80	脚部に３孔、坏部内面はていねいなミガキ	赤褐粒子	橙 5YR6/6	不良	
第 11 図	18	エンメイジ 108	土師器	高坏	8.6	(4.5)	—	30	脚部に４孔、２孔が並んだものが 180 度反対にある		明赤褐 5YR5/8	不良	
第 11 図	19	エンメイジ 51・84	土師器	高坏	(13.7)	(7.1)	—	40	脚部に３孔		明赤褐 5YR5/8	不良	赤彩あり
第 11 図	20	エンメイジ 49・57	土師器	高坏	—	(6.0)	16.3	30	脚部の上段に３孔・下段２孔	赤褐色粒子	にぶい黄橙 10YR8/4	不良	
第 11 図	21	エンメイジ 97	土師器	器台	8.8	9.5	8.8	60	見込中央に１孔、脚部に３孔		明赤褐 5YR5/6	不良	欠山式（日本土器事典 p647）愛知県仁所野遺跡出土、坏部と脚部の差が明瞭で口縁の単純なもの
第 11 図	22	エンメイジ 66	土師器	小型壺	10.8	8.7	0.4	90			橙 7.5YR6/6	不良	
第 11 図	23	エンメイジ 96	土師器	丸底壺？	21.4	(8.7)	—	10			にぶい橙 7.5YR6/4	不良	
第 11 図	24	エンメイジ 76	土師器	丸底壺	—	(11.9)	4.6	70			浅黄橙 10YR8/4	不良	
第 11 図	25	エンメイジ 122	土師器	甑	12.7	8.5	3.3	90	口唇外面と内面はていねいなミガキ		橙 7.5YR6/6	良	
第 11 図	26	エンメイジ 27	土師器	手捏土器	7.4	6.1	6.1	80		赤褐色粒子	にぶい褐 7.5YR5/4	不良	
第 12 図	W01	エンメイジ 128	木製品	板材	9.2	33.3	1.7	—	両面を丁寧に平坦に加工されている。	—	—	—	焼け焦げあり
第 12 図	W02	エンメイジ 134	木製品	角材	5.2	44.2	2.5	—	幅広の板材を荒割して角材にしたもの。	—	—	—	
第 12 図	W03	エンメイジ 135	木製品	角材	3.1	75.2	2.7	—	幅広の板材を荒割して角材にしたもの。	—	—	—	
第 13 図	W04	エンメイジ 139	木製品	農工具	4.4	56.4	3.4	—	船底状の緩やかに湾曲した凸面をもつ。	—	—	—	
第 13 図	W05	エンメイジ	木製品	角材	2.9	52.8	2.7	—		—	—	—	

第４章　まとめ

延命寺遺跡の名称は字名「延命寺」に因むもので、現在は延命寺という寺院はない。しかし、『甲斐国志』の記述によると、今回の調査地点から北方約 300 ｍの尾根上（標高 354 ｍ）にある上万力金桜神社に付属する寺院があったとされている（第 2 章）。今回の調査では、寺院に関連する遺構・遺物について留意したが、寺院に関わるものは確認できなかった。また、今回の調査地区とは夕川を隔てた対岸を、山梨市教育委員会と㈶山梨文化財研究所が平成 15 年（2003）に発掘調査を行っているが、やはり寺院に関連する遺構・遺物は発見されていない。

西関東連絡道路予定地が延命寺遺跡の範囲に及ぶために、平成 17 年 11 月および 12 月に試掘調査を実施し、古墳時代の土器が集中的に発見されたため、集落跡である可能性が高いことが判明し、本調査に着手した。

本調査では、調査区の南側の夕川に隣接した部分に広がる黒色砂質粘土と黒褐色砂質シルトと灰白細砂層の互層となった堆積層中から、多数の古墳時代前期の土器が出土した。巻頭に出土状況の写真を掲載した台付甕(1)は、破損していたものの微細な破片までその場に残存しており、完形品として出土地点に到達し、土圧などにより破損したものと判断される。また台付甕 (7)、高坏 (17)、小型壺 (22)、甑 (25)、手捏土器 (26) もほぼ完形品であり、その他にも残存率の高い個体が出土した。住居跡などの遺構である可能性を考慮して慎重に精査したが、遺物を包含している黒色砂質粘土や黒褐色砂質シルトなどの遺物包含層は、水中で堆積したことを示す葉理（ラミナ）構造（粗砂以下の洪水堆積層の中にみられる薄い縞状［通常 10㎜以下］の堆積構造のこと）をもつものばかりであった。さらに部分的に住居跡などの遺構が残存していないか検討したが、掘り込みやプランあるいは硬化面や焼土・炭化物が散布する面などを認めることができなかった。そして最終的に、包含層を掘り下げ、巨礫～大礫を主体とする旧河道の河床面の広がりを確認した。遺物の出土範囲と、この河床面の広がりはよく対応しており、旧河道を埋没させている堆積層が遺物包含層となっていることが判明した。

出土したこれらの土器で注目すべきは、土器には特別に磨耗の痕跡を見出すことができないことである。台地上の集落跡から出土する土器と差を認めることができないのである。しかし、包含層の堆積構造を観察すると、葉理（ラミナ）構造が顕著であり、水中での堆積であることを示している。

水流により河床で礫を移動させる流力は、中礫（粒径 64 ～ 4㎜）：1 ｍ / 秒～ 30㎝ / 秒、細礫（粒径 4 ～ 2㎜）:30 ㎝ / 秒～ 15㎝ / 秒というデータがあり、礫を含まない細砂～シルト～粘土の堆積層が形成される流速は、およそ 1 秒間に 15 ～ 30㎝以下と推定され、こうした状況で土器が埋没する場合には、ほとんど表面が磨耗しないものと考えられる。

出土した木製品 5 点の中で、木製品 W05 は角材に加工されているが、木製品 W02 と W03 は、板材を荒割した角材であり、木製品 W04 も農工具を荒割した材である。古材を転用した護岸のための「しがらみ」などの一部である可能性などが考えられる。

出土した木製品は、当然ながら土器と異なり水に浮くことから上流から運ばれてきたことを想定しなければならないが、この調査区で出土した土器はいずれも古墳時代前期のものであることから、ここでは同時期のものと判断した。

出土した古墳時代前期の土器に関連するのと思われるのは、同じく延命寺遺跡内の夕川南岸を発掘調査（山梨市教育委員会・帝京大学山梨文化財研究所 2003）により、同時期の３軒の住居跡と遺物が出土し集落跡の存在が確認されていることである。今回の出土遺物は、夕川南岸の集落の人々の暮らしに関わるものと考えられる。

写 真 図 版

S 字状口縁台付甕(1)発見

調査区南側（東から）

旧河道部分の調査（東から）

旧河道部分の調査（近景）

大円礫集中部分の調査

大円礫集中部分の土器片出土状態

写真図版 2

第 11 トレンチ近景（南から）

第 11 トレンチ東壁

大円礫集中部分東側

第 5 トレンチ西端付近旧河道断面

台付甕（1）発見の様子

台付甕（1）周辺の精査

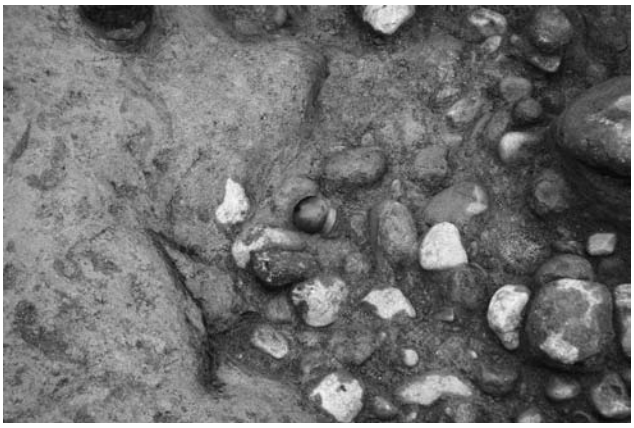
旧河道の掘り下げ作業（1）

旧河道の掘り下げ作業（2）

第 12 トレンチ東壁

第 14 トレンチ東壁

旧河道　小型壺（22）の出土状態



旧河道　小型壺（22）の出土状態拡大

旧河道　木製品出土状態

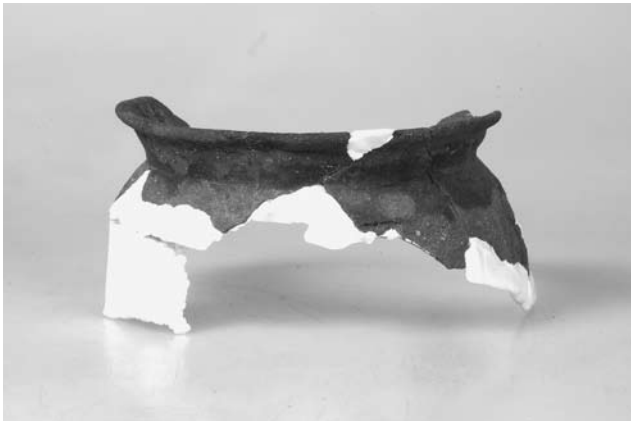
旧河道付近遠景（背後の白い建物が山梨厚生病院）

旧河道付近遠景（北東から）

旧河道河床（東から）

写真図版 4

S 字状口縁台付甕（1）



S 字状口縁台付甕 口縁部（2）

台付甕（4）

S 字状口縁台付甕 胴部（2）

台付甕（6）

台付甕 脚部（5）

台付甕（7）

小型甕（8）

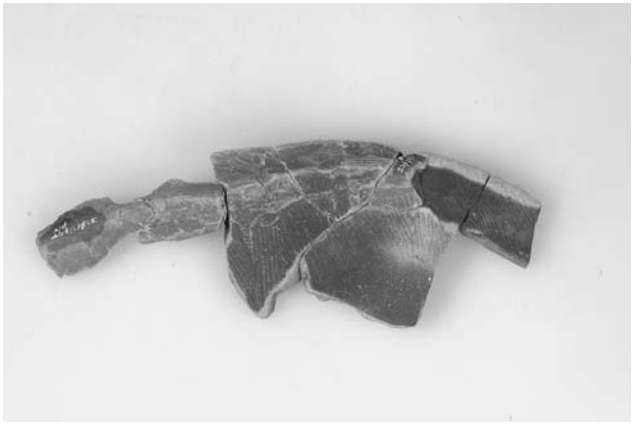
甕（9）

甕（10）

甕（11）

甕（12）

高坏（14）



有段口縁壺の一部（13）

高坏（15）

高坏　焼成後の穿孔（16）

写真図版 6

高坏（17）

高坏（19）

高坏（20）

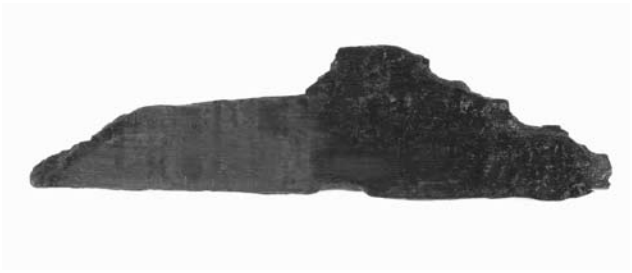
器台（21）

小型壺（22）

丸底壺（24）

甑（25）

手捏土器（26）



木製品（W01）

木製品（W01）

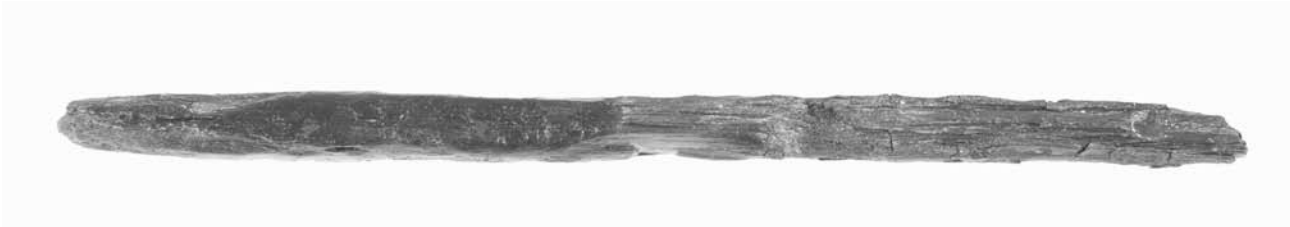
木製品（W01 部分）

木製品（W04 部分）

木製品（W02）

木製品（W03）

木製品（W04）



木製品（W05）

報告書抄録

ふりがな		えんめいじいせき						
書名		延命寺遺跡						
副書名		西関東連絡道路建設に伴う発掘調査報告書						
シリーズ名		山梨県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号		第 251 集						
編著者名		村石眞澄・大木丈夫						
編集機関		山梨県埋蔵文化財センター						
所在地		〒 400-1508　山梨県甲府市下曾根町 923　055-266-3016						
発行年月日		2008/3/31						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えんめいじいせき 延命寺遺跡	やまなしけん やまなししおちあいあざえんめいじ 山梨県山梨市落合字延命寺 180 外	19205	50	35° 41′ 12″ （世界測地系）	138° 40′ 47″ （世界測地系）	2006. 5．8～ 6．5	約 2,200	西関東連絡道路建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
延命寺遺跡	散布地	古墳時代前期	古墳時代前期の土器を含む旧河道		土師器（S 字状口縁台付甕、台付甕、甕、高坏、丸底壺、甑、手捏ね土器など）木製品		旧河道を埋没している河川堆積層から磨耗を受けていない残存率の高い土器が出土した。	

山梨県埋蔵文化財調査報告書　　第 251 集

2008 年（平成 20 年 3 月 21 日）印刷

2008 年（平成 20 年 3 月 31 日）発行

延命寺遺跡（えんめいじいせき）

－西関東連絡道路建設に伴う発掘調査報告書－

編　集　山梨県埋蔵文化財センター

〒 400-1508　山梨県甲府市下曽根町 923

℡　055-266-3016

E-mail：　maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

発　行　山梨県教育委員会

山 梨 県 土 木 部

印　刷　峡南堂印刷所